

森 町

石倉3遺跡・石倉5遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成15年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

森 町

石倉3遺跡・石倉5遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成15年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



配石遺構と胸ヶ岳



配石遺構から内浦湾を臨む



- ← Ⅲ層
- ← Ⅳ層 (B-Tm)
- ← Va層
- ← Vb層
- ← VI層
- ← VII層 (Ko-g)
- ← VIII層

基本層序



S-1 断面



S-1 礫の出土状況



S-1下のピット (P-1) 断面

例 言

1. 本書は、平成15年度に財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した、北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）建設工事に伴う、森町石倉3遺跡と石倉5遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。石倉5遺跡については、第I章の調査の概要（I-1～6）と第II章の遺跡の位置と環境（II-1・2）に記述し、改めて章は設けなかった。従って、III・IV章は石倉3遺跡についての記述である。
2. 調査区の設定は道路公団の工事設計図を基にした。これは函館側を起点にしたものであり、森町内では大きく曲がった路線となっている。このため作成した図面は、地図の基本である「北が上」の体裁を取っていない。
3. 本書の執筆は、第I章：鎌田 望・新家水奈、第II章：鎌田、第III章：新家、第IV章：鎌田・新家が担当した。編集は鎌田が行なった。
4. 写真撮影は、現場においては担当調査員が各自の責任において撮影し、第1調査部第1調査課長立川トマスが一括して写真整理を行なった。整理作業時の遺物撮影は第2調査部第2調査課中山昭大が行なった。
5. 調査報告終了後の出土遺物および記録類については森町教育委員会が保管する。
6. 調査にあたっては下記の諸機関、各位からご指導ご協力をいただいた（順不同、敬称略）。
北海道教育委員会、森町教育委員会、八雲町教育委員会、森町立濁川小学校、森町教育委員会：
藤田 登、荻野幸男、横山英介。

記号等の説明

1. 遺構の表記は以下に示す記号を使用し、原則として確認順に番号を付した。

P:土坑 TP:Tピット S:集石

2. 遺構図の方位は真北を示す。遺構平面図の+はグリッドライン交点で、傍らの名称記号は右下のグリッドを示している。遺構平面図の・小数字とセクションレベルは、標高(単位はm)である。

3. 遺構図の出土遺物は、下記の記号を使用した。

底面 覆土		底面 覆土		底面 覆土	
土 器:	● ○	剥片石器:	▲ △	礫 石 器:	▼ ▽
剥 片:	■ □	礫・礫片:	◆ ◇	そ の 他:	☆ ★

4. 遺構の最大規模は、「確認面での長軸長×短軸長/底面での長軸長×短軸長/確認面からの最大深・最大厚(単位はm)」の順に記した。一部破壊されているものは現存長を()で示し、不明のものは-で示した。

5. 実測図の縮尺は原則として下記のとおりである。下記以外の図および、例外については図内にスケールを付して示した。

遺 構:	1:40	
台 石:	1:4	剥片石器: 1:2
土器拓本:	1:3	石 斧: 1:2
礫 石 器:	1:3	土製品・石製品: 1:2

6. 土層の表記は、基本土層についてはローマ数字で、遺構の層位についてはアラビア数字で示した。

7. 土層の色調は、『新版標準土色帖』(小川・竹原 1967)に従った。

8. 火山灰の略号は、『北海道の火山灰』(北海道火山灰命名委員会 1982)による。

9. 土器、石器、土製品、石製品の大きさは、「最大長×最大幅×最大厚」で記した。剥片石器、礫石器は図中の上下幅を「長さ」、左右幅を「幅」とし、厚さは最大値を採用した。なお、実測図中でたたき痕はV-V、すり痕は| - |で範囲を表した。

目 次

口絵

例言

記号等の説明

目次

挿図目次

表目次

写真図版目次

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯	1
4 調査の概要	3
(1) 石倉3遺跡	3
(2) 石倉5遺跡	3
5 調査の方法	5
(1) 調査区(グリッド)の設定	5
(2) 座標値	5
(3) 発掘調査の方法	5
(4) 一次整理の方法	7
(5) 二次整理の方法	8
6 調査結果の概要	8
(1) 石倉3遺跡	8
(2) 石倉5遺跡	8
7 土層の区分	10
8 遺物の整理と分類	15
(1) 土器	15
(2) 石器等	16
(3) 記録類、遺物の収納・保管	16
II 遺跡の位置と環境	17
1 遺跡の位置と周辺の地形	17
2 周辺の遺跡	19
III 石倉3遺跡 遺構とその遺物	22
1 概 要	22
2 配石を伴う土坑	22
3 Tピット	29
IV 石倉3遺跡 包含層出土の遺物	30
1 概 要	30
2 土 器	31
3 石器等	35

写真図版

引用・参考文献

報告書抄録

挿 図 目 次

I 調査の概要

図 I-1	森町の位置と遺跡位置図	2
図 I-2	石倉3遺跡の調査範囲と周辺の地形	3
図 I-3	石倉5遺跡の調査範囲と周辺の地形	4
図 I-4	石倉3遺跡・石倉5遺跡 グリッド設定図	6
図 I-5	石倉3遺跡 調査最終面	7
図 I-6	石倉3遺跡 遺構位置図・石倉5遺跡 最終面地形図	9
図 I-7	基本土層柱状図	10
図 I-8	石倉3遺跡 土層断面観察位置図	11
図 I-9	石倉3遺跡 土層断面図(1)	12
図 I-10	石倉3遺跡 土層断面図(2)	13
図 I-11	石倉3遺跡 土層断面図(3)	14

II 遺跡の位置と環境

図 II-1	遺跡位置図	17
図 II-2	周辺の遺跡	18

III 石倉3遺跡 遺構とその遺物

図 III-1	遺構位置図・S-1(1)	23
図 III-2	S-1(2)	24
図 III-3	S-1(3)・P-1	25
図 III-4	S-1/P-1出土の遺物(1)	26
図 III-5	S-1/P-1出土の遺物(2)	27
図 III-6	TP-1	29

IV 石倉3遺跡 包含層出土の遺物

図 IV-1	包含層出土遺物分布図	30
図 IV-2	包含層出土土器分布図(1)	31
図 IV-3	包含層出土土器分布図(2)	32
図 IV-4	包含層出土の土器	33
図 IV-5	包含層出土土器等分布図	36
図 IV-6	包含層出土の石器(1)	37
図 IV-7	包含層出土の石器(2)	38
図 IV-8	包含層出土の石器(3)	39

表 目 次

I 調査の概要	
表I-1 石倉3遺跡 遺構数一覧	8
表I-2 石倉3遺跡 出土遺物一覧	8
表I-3 基本層序属性一覧	11
II 遺跡の位置と環境	
表II-1 周辺の遺跡一覧(1) 森町	20
表II-2 周辺の遺跡一覧(2) 八雲町	21
III 石倉3遺跡 遺構とその遺物	
表III-1 遺構一覧	22
表III-2 遺構出土遺物一覧	22
表III-3 遺構出土掲載遺物一覧	28
IV 石倉3遺跡 包含層出土の遺物	
表IV-1 包含層出土層位別遺物一覧	30
表IV-2 層位別出土土器一覧	31
表IV-3 包含層出土掲載土器一覧	34
表IV-4 包含層出土層位別石器一覧	40
表IV-5 包含層出土掲載石器一覧	40

写真図版目次

図版1 石倉3遺跡全景、包含層遺物出土状況、ベルコン使用作業状況、 Tピット(TP-1)完掘状況、配石遺構(S-1)と調査風景	41
図版2 S-1 礫の出土状況、S-1 断面、S-1下のピット(P-1)断面、 P-1 完掘状況、石倉3遺跡 平坦部調査終了風景、 石倉3遺跡 斜面部調査終了風景	42
図版3 石倉5遺跡 伏開前状況(三次郎川右岸側より撮影)、石倉5遺跡 完掘状況	43
図版4 石倉3遺跡 遺構(S-1/P-1)出土の遺物	44
図版5 石倉3遺跡 包含層出土の土器	45
図版6 石倉3遺跡 包含層出土の石器	46

I 調査の概要

1 調査要項

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部間）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

受託者：財団法人北海道埋蔵文化財センター

受託期間：平成15年4月1日～平成16年3月31日

遺跡名	石倉3遺跡	石倉5遺跡
登録番号	B-15-33	B-15-36
所在地	茅部郡森町 字石倉町 482,483,490番地	茅部郡森町 字石倉町 512,513,519番地
調査面積	3,670㎡	962㎡
発掘期間	5月6日～7月23日	7月14日～8月7日

2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長 森重橋一 専務理事 宮崎 勝 常務理事兼第1調査部長 畑 宏明

総務部長 下村一久

第2調査部長 西田 茂

第3調査課 課長 熊谷仁志（石倉3遺跡・石倉5遺跡発掘担当者）
主査 鎌田 望（石倉3遺跡・石倉5遺跡発掘担当者）
主任 田中哲郎（石倉5遺跡発掘担当者）
主任 新家水奈（石倉3遺跡発掘担当者）
主任 大桑司統

3 調査にいたる経緯

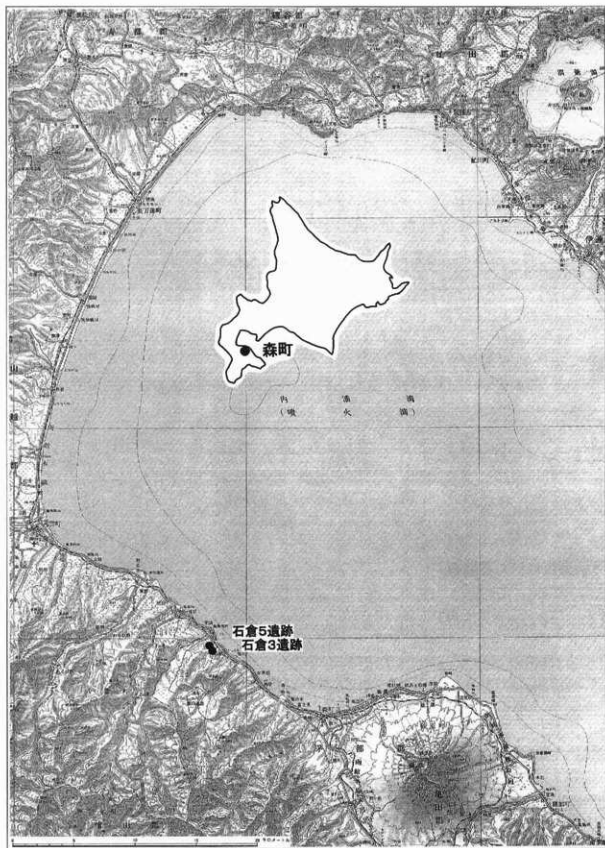
北海道縦貫自動車道路は、函館市を基点として苫小牧・札幌・旭川の各市を経由して名寄市に至る、総延長488kmの自動車専用道路である。このうち、長万部町国縫IC～和寒町和寒IC間359kmは既に供用されている。七飯～長万部間の路線については、平成5年11月から建設事業が進められている。

平成2年4月、この事業に関する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、日本道路公団札幌建設局（現：日本道路公団北海道支社）から北海道教育委員会教育長あてに事前協議書が提出された。これを受けて、北海道教育委員会は平成2年4月および平成7年11月に所在確認調査を行い、平成5年からはこの路線の北側の長万部町から試掘調査を開始した。また、平成7年10月からは順次、範囲確認調査が実施されている。

七飯～長万部間の発掘調査の一部については、財団法人北海道埋蔵文化財センターが委託を受け、平成10年度から行なっている。平成10年度の長万部町と八雲町の遺跡から始まり、平成11年度には長万部町の調査を終了した。八雲町の遺跡の調査は平成13年度に終了した。平成13年度からは森町の遺跡の調査を行なっている。

石倉3遺跡は平成2年4月の所在確認調査により遺跡であることが判明し、平成14年8月に試掘調査、10月に再試掘調査が行なわれた。石倉5遺跡は平成2年4月に所在確認調査、平成15年6月に試掘調査が行なわれた。

（鎌田 望）



この図は国土地理院発行 20 万分の 1 地形図「室蘭」(NK-54-21、平成 5 年 2 月 1 日発行)を複製・加筆したものである。

図 I - 1 森町の位置と遺跡位置図

4 調査の概要

(1) 石倉3遺跡 (図I-1・2・5)

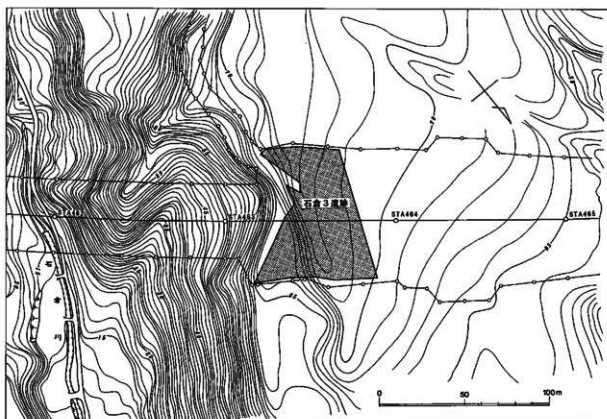
遺跡は森町の北西部、八雲町との町境より約3km南側にある。海岸から400mほど内陸、石倉川左岸の海岸段丘上の標高65~72mに立地する。東南方向には駒ヶ岳が望める。調査範囲は、北西に傾斜する標高70~73mの緩斜面、石倉川に面する落差6mの急斜面、その下のテラス部分(標高65~67m)からなる。

調査はまず、緩斜面部分の25%調査を行い遺構・遺物の分布を把握するとともに、工事工程の都合上優先される工事用道路建設予定部分を含む調査範囲南西側の包含層調査を行なった。この部分ではTピット1基を検出した。また、工事用道路の海側に隣接する調査範囲の中で最も標高の高い部分で、配石を伴う土坑を検出した。ベルトコンベアの準備が整った6月からは急斜面とその下のテラス部分の25%調査を行なった。文化課の指導により、図I-5のようにトレンチ調査を併用し、急斜面部分の一部は遺物がないことからトレンチ調査をもって調査終了とみなすこととなった。また、緩斜面部分の海側については駒ヶ岳起源降下軽石(Ko-g)層の面を調査最終面とした。

(2) 石倉5遺跡 (図I-1・3)

石倉5遺跡は森町の北西部、八雲町との町境より2kmほど南側にある。海岸から250mほど内陸、噴火湾に流れ込む三次郎川の右岸段丘上の標高53~58mに立地する。調査範囲には三次郎川に流れ込む3本の沢が横切る。北西側は三次郎川に向かって傾斜する斜面である。この下の段丘には三次郎川右岸遺跡、その北岸には三次郎川左岸遺跡がある。

三次郎川右岸遺跡と三次郎川左岸遺跡は平成15年6月に試掘調査が行なわれた。その結果、7月から両遺跡の調査と並行して石倉5遺跡の調査を行なった。試掘調査の結果をもとに、重機により表土から駒ヶ岳起源降下軽石(Ko-g)層直上までの土を除去して精査し遺構の有無を確認した。(鎌田)



図I-2 石倉3遺跡の調査範囲と周辺の地形

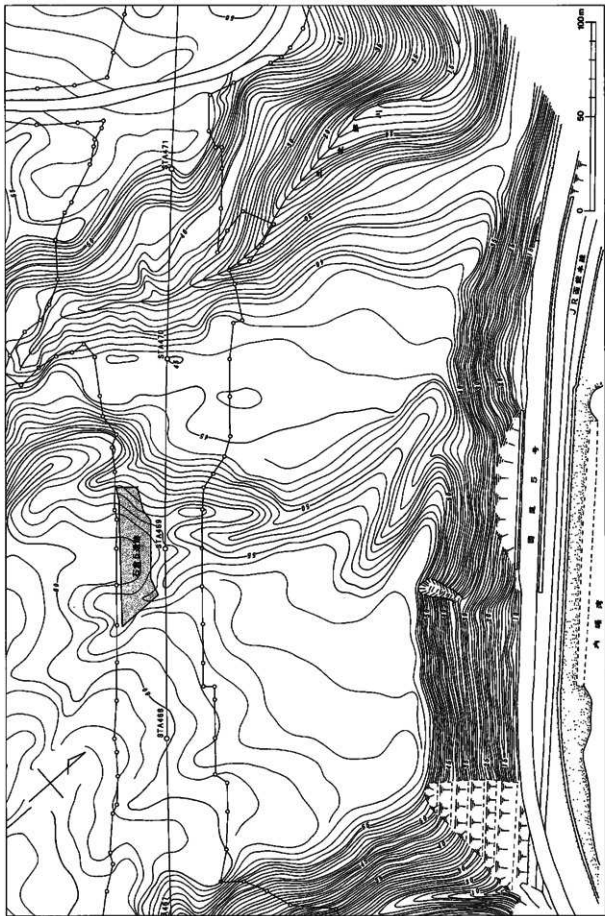


図 I - 3 石倉5遺跡の調査範囲と周辺の地形

5 調査の方法

(1) 調査区(グリッド)の設定(図I-4)

石倉3遺跡は、北海道縦貫自動車道工事用地内の基準杭STA.464+00=M25とし、STA.465+00と結んだ線を基準のMラインとして、調査区域3,670㎡を、また石倉5遺跡は、同じく北海道縦貫自動車道工事用地内の基準杭STA.469+00=M20とし、STA.470+00と結んだ線を基準のMラインとして、調査区域962㎡を、それぞれ4×4mメッシュの区画を用いて設定した。

区画(グリッド)の名称は、Mラインと平行する北西-南東方向ラインにアルファベット、北東-南西方向のラインにアラビア数字を用い、それぞれ交差する地点に調査杭を打設した。南側交点はそのグリッドの名称となる。「H13」のように表記し、アルファベットと数字の間にハイフンは入れずに、遺構名と区別した。また、このアラビア数字で示す直線は真北に対して、石倉3遺跡では39°18'22"、石倉5遺跡では42°13'20"東偏する。(新家水奈)

(2) 座標値(図I-4)

石倉3遺跡の2点(M15とR15の測量杭)および石倉5遺跡の2点(H20とJ20の測量杭)の世界測地系の座標11系におけるバイリニア法(北海道.par Ver.2.1.1)を用いた座標変換による座標値(X、Y)、TeamGEO2(3.20(ビルド32))を用いた座標変換(パラメータファイル:北海道.per(Ver.2.1.1))による緯度(B)・経度(L)は以下の通りである。

M15	X=-204309.983m	Y=17978.480m	B=42° 9' 37.9506"	L=140° 28' 3.2439"
R15	X=-204294.510m	Y=17991.149m	B=42° 9' 38.4511"	L=140° 28' 3.7975"
H20	X=-203979.367m	Y=17550.078m	B=42° 9' 48.7019"	L=140° 27' 44.6162"
J20	X=-203973.443m	Y=17555.454m	B=42° 9' 48.8935"	L=140° 27' 44.8511"

(3) 発掘調査の方法(図I-5)

石倉3遺跡は25%調査により遺構・遺物の分布状況を把握して包含層調査・遺構調査を行なった。石倉5遺跡は試掘調査の結果から、重機により表土から胸ヶ岳起源降下軽石(Ko-g)層までの土を除去し、ジョレンにより清掃して遺構確認調査を行なった。従って以下は石倉3遺跡の調査についての記述である。

海岸段丘上に立地する石倉3遺跡の調査範囲は、緩斜面、急斜面、テラス部分からなる。調査は緩斜面部分の25%調査と工事用道路建設予定部分を含む調査範囲南西側の包含層調査・遺構調査、急斜面とその下のテラス部分の25%調査、テラス部分と緩斜面部分海側の包含層調査の順に行なった。

25%調査

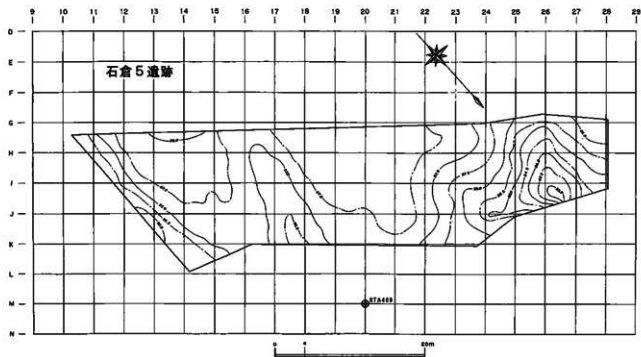
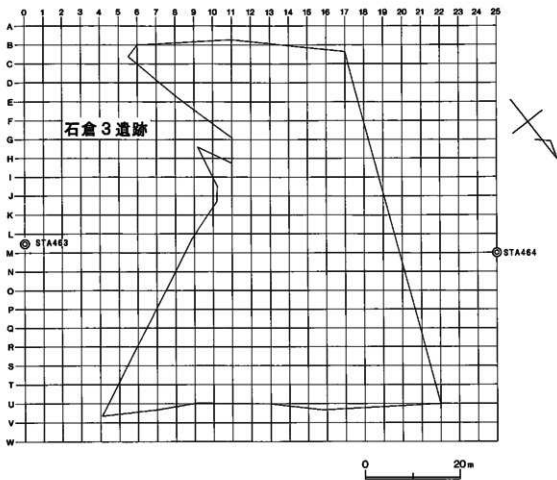
調査範囲全体にわたり適当な間隔を空けて25%調査を行い、遺物分布の濃淡を確認した。急斜面とその下のテラス部分および緩斜面部分の海側では、幅1mの土層観察用の溝によるトレンチ調査を併用した。

包含層調査

25%調査により遺物分布の濃淡を確認して、分布の濃い部分から包含層調査を行なった。Ⅲ～Ⅵ層の各層は、調査区ごとに遺物の多寡、土層の変化を見極めながら移植ゴテと片手鎌により2cmずつ掘り下げ、遺構・遺物が確認されなかった部分については、スコップにより深さ2～5cmの細かい刻み目を入れた後、ジョレンにより土を除去するという方法を繰り返して掘り下げて調査した。本来的な遺物包含層であるⅤ層については、上位・中位・下位の3段階に分けて調査した。

遺構調査

調査範囲南西側緩斜面では露が出土しはじめたため、2cmずつ掘り下げ、清掃と写真撮影、遺物の



図I-4 石倉3遺跡・石倉5遺跡 グリッド設定図

実測と遺物の取り上げを繰り返して、配石と敷き詰められた小礫の検出に努めた。また数箇所に土層観察用の溝を掘り、配石の埋設状況を確認した。落ち込みが確認された土坑・Tピットについては半截して土層観察用の壁面を残して掘り下げた。

遺物の取り上げ

包含層の遺物は位置や層位を記録し、小発掘区ごとに取り上げた。遺構の遺物は実測図により位置、層位、標高を記録し、番号を付けて取り上げた。出土状況に応じて、写真や出土状況図など詳細な記録化に努めた。(鎌田)

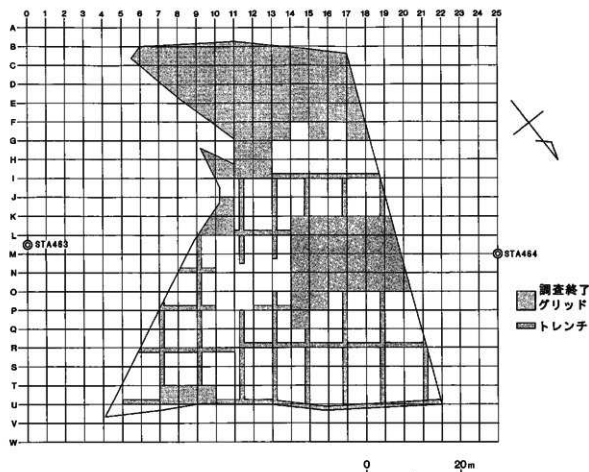
(4) 一次整理の方法

取り上げた遺物は日付順の取り上げ台帳をその場で作成し、その後一次整理もできるだけ現地で行った。遺物の水洗・乾燥後、注記をおこない、以下のように、遺跡名の略称IK3、遺構出土のものは遺構名、出土層位、遺物番号を、包含層出土のものはIK3の後にグリッド名+小グリッド名、出土層位を記入した。

包含層出土の場合 例 IK3 K15cVb

遺構出土の場合 例 IK3 P-1 フク1.35

遺物の一次整理終了後、分類も現地でおこなった。遺物分類カードを作成し、日付、層位、点数、分類名、石器は石材等も記入し、それぞれ遺物に添付してビニール袋に収納した。石器の中にはこの時点で重量を含む計測をおこなったものもある。その後遺構出土のものは遺構別、包含層出土のものは分類別に分けて現地でコンテナに仮収納した。10月末の現地調査終了時、石倉3遺跡から江別の当



図I-5 石倉3遺跡 調査最終面

センター作業所に搬送し、再び整理作業を開始した。センターでは取り上げ台帳および分類カードの情報をもとに台帳作成、集計作業等を進めた。

(5) 二次整理の方法

現地調査終了後は江別市内の整理作業所において、現地での実測図面の整理、遺跡全体図・地形図・遺構図の作成、トレース、出土遺物の再・細分類、遺物台帳と遺物の照合、台帳の補正、集計、表作成、土器・石器の接合・復元作業、報告書掲載遺物の実測、トレース図作成、写真撮影等の報告書作成作業を行なった。土器・石器それぞれの細分類、二次整理方法については8節(15・16ページ)で述べる。

(新家)

6 調査結果の概要

(1) 石倉3遺跡(表I-1・2、図I-6)

調査範囲の中で最も標高の高い南東部で縄文時代後期初頭の配石を伴う土坑1基を検出した。配石は3つのまとまりが認められ、重さ10~30kgの大礫と径0.5~5cm程の細~小礫からなる。いずれも安山岩が主体である。礫の下には直径1mほどの土壌が検出された。また、緩斜面西側ではTピットを1基検出した。遺物は、縄文時代後期初頭の天祐寺式土器、涌元式土器やトリサキ式土器をはじめ、石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、メノウのフレイク、礫など20,221点が出土した。調査範囲のほぼ全面に径5~10cm程の中礫が分布していた。

(2) 石倉5遺跡(図I-6)

試掘調査の結果、今年度の調査範囲には遺物が希薄であったため、重機により駒ヶ岳起源降下軽石(Ko-g)層直上までの土を除去して遺構確認調査を行なったが、遺構・遺物は確認されなかった。次年度以降には今回の調査範囲より海側の部分の調査が行なわれる予定である。

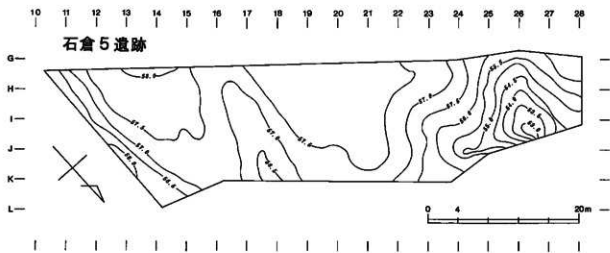
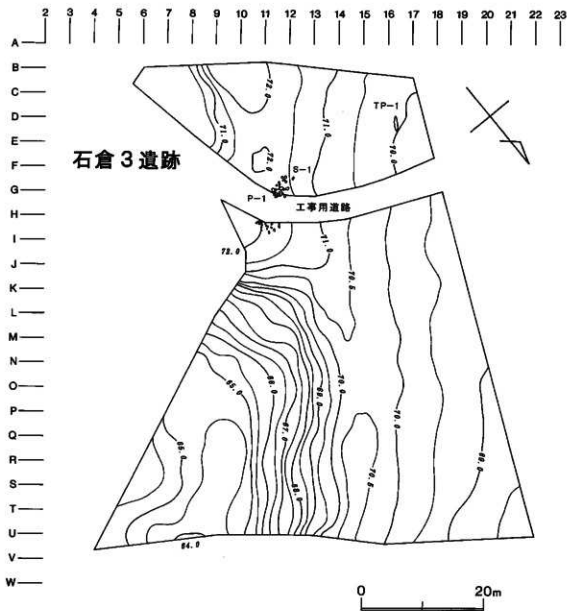
(鎌田)

表I-1 石倉3遺跡 遺構数一覧

遺構名	検出数
配石(S)	1
土坑(P)	1
Tピット(TP)	1
合計	3

表I-2 石倉3遺跡 出土遺物一覧

分類	土器			石器											合計				
	Ⅲa	Ⅳa	Ⅳ	剥片石器									礫石器						
				石鏃	つまみ付きナイフ	スクレイパー	Uフレイク	石核	フレイク	石斧	原石	すり石	たたき石	製石器		扁平打	砥石	礫	
遺構		41															1	11767	11809
包含層	3	530	2	9	5	11	9	2	151	4	6	19	1	3				7657	8412
合計	3	571	2	9	5	11	9	2	151	4	3	6	19	1	1			19424	20221



図I-6 石倉3遺跡 遺構位置図・石倉5遺跡 最終面地形図

7 土層の区分 (図 I-7~11)

基本層序、遺構の土層の観察には『標準土色帖』(小山・竹原 1967) および『土壌ハンドブック』(ペドロジスト懇談会 1984) を用いた。

主な観察項目と記載順序は以下のとおり。

1. 土性区分 砂土 (S)、砂壤土 (SL)、壤土 (L)、シルト質壤土 (SIL)、埴壤土 (CL)、埴土 (C) に分けられる。
2. 色調 色相、明度、彩度を記号および数値で表す方法を採用した (小山・竹原 1967)。
3. 粘着性 なし、弱、中、強に分けられる。
4. 堅密度 すこぶるしょう、しょう、軟、堅、すこぶる堅、固結に分けられる。
5. 下位の層との層界の明瞭性 明瞭、判然、漸変、散漫に分けられる。
6. 層界の起伏 平坦、波状、不規則、不連続に分けられる。
7. 礫の混入状況 混入面積の割合 (%)、石礫の大きさ (細礫0.2~1cm、小礫1~5cm、中礫5~10cm、大礫10~20cm、巨礫20~30cm、巨岩30cm以上)、石礫の形状 (角礫、亜角礫、亜円礫、円礫)、石礫の風化の度合い (未風化、半風化、風化、腐朽)、石礫の種類 (軽石、堆積岩等) を記入。

I層: 表土・耕作土

II層: 駒ヶ岳起源降下火山灰 (Ko-d) 層噴出年代は1640年。平均層厚は150cm。

III層: 黒色土

II層 (Ko-d) 直下の腐植土層。椽文〜中・近世の遺物包含層。今回は遺物・遺構は検出されていない。層厚2~4cm。

IV層: にぶい黄褐色土

白頭山苫小牧起源降下火山灰 (B-Tm) 層。噴出年代924~933年、944~947年。層厚0~3cm。

V層: 黒色土

椽文〜統縄文・縄文時代晩〜早期の遺物包含層。

Va層: 層厚0~10cm。Vb層よりも黒色度合いが強い。今回の調査では椽文、統縄文時代の遺物は出土していない。

Vb層: Va層よりもやや明るい。層厚約20cm。

VI層: 暗褐色土

漸移層。Ko-g粒多く混入。層厚0~5cm。

VII層: 駒ヶ岳起源降下軽石 (Ko-g) 層

褐〜黄褐色土。噴出年代約6000年前。層厚約15cm。

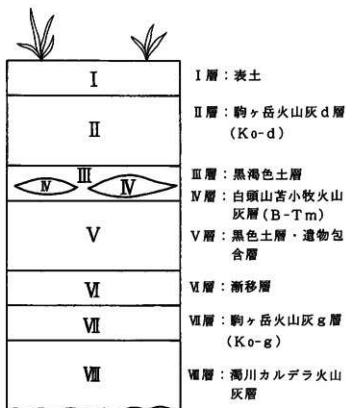


図 I-7 基本土層柱状図

層層：褐色土

縄文時代早期の遺物包含層。濁川カルデラ (Ng) 起源降下火山灰の風化再堆積 (ローム) 層。層厚約60cm。今回の調査では縄文時代早期の遺物は出土していない。(新家)

表 I-3 基本層序属性一覧

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅密度	層界の明瞭性	層界の起伏	礫の混入	その他
I	表								
II	砂土	におい黄褐色	10YR 5/3	無し	強	明瞭	平坦	100% 細礫 亜円礫 未風化 軽石	駒ヶ岳起源降下火山灰 (Ko-d) 層
III	埴埴土	黒	10YR 1.7/1	強	堅	明瞭	不連続	なし	II層 (Ko-d) 直下の腐植土層
IV	埴埴土	におい黄褐色	10YR 4/3	中	堅	明瞭	不連続	なし	白旗山苫小牧起源降下火山灰 (B-Tm) 層
Va	埴埴土	黒	10YR 1.7/1 ~N 2/0	強	堅	判然	平坦	なし	遺物包含層
Vb	埴埴土	黒	10YR 1.7/1	強	堅	判然	平坦	なし	遺物包含層
VI	埴埴土	黒褐色	10YR 2/3	中	堅	判然	不連続	40% 細礫 亜円礫 半風化 軽石	V層とVII層の漸移層
VII	砂土	黄褐色~黒	10YR 4.5/6	無し	堅	判然	不連続	100% 細礫 亜円礫 半風化 軽石	駒ヶ岳起源降下軽石 (Ko-g) 層
VIII	埴埴土	におい黄褐色	10YR 4/3	中	すこぶる堅	明瞭	平坦	2% 細礫 亜円礫 風化 軽石 角閃石 安山岩?	濁川起源降下火山灰の風化再堆積 (ローム) 層 層厚約70cm φ1~1.5cmの青灰色の火山砂礫・軽石混入

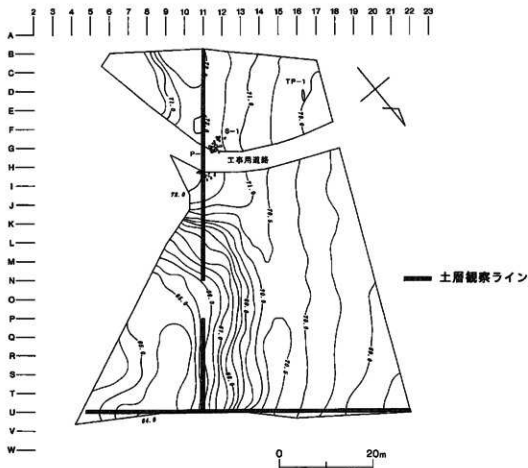


図 I-8 石倉3遺跡 土層断面観察位置図

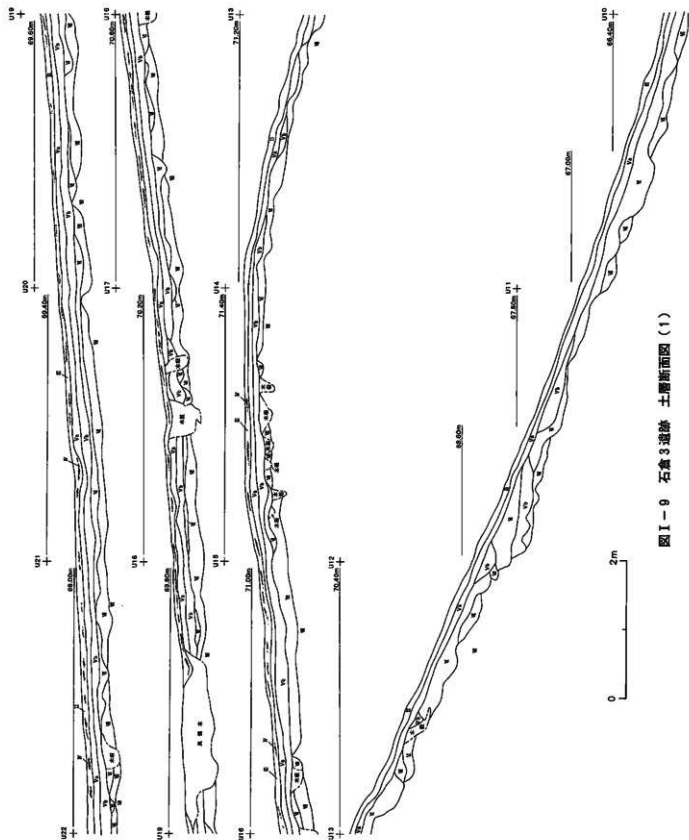
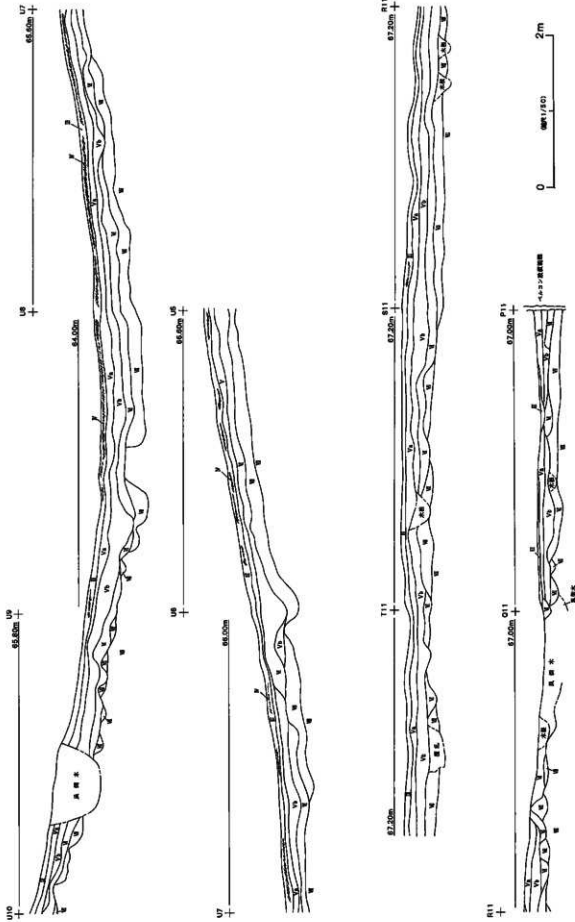


圖 I-9 石碇 3 道線 土層斷面圖 (1)



図I-10 石倉3遺跡 土層断面図 (2)

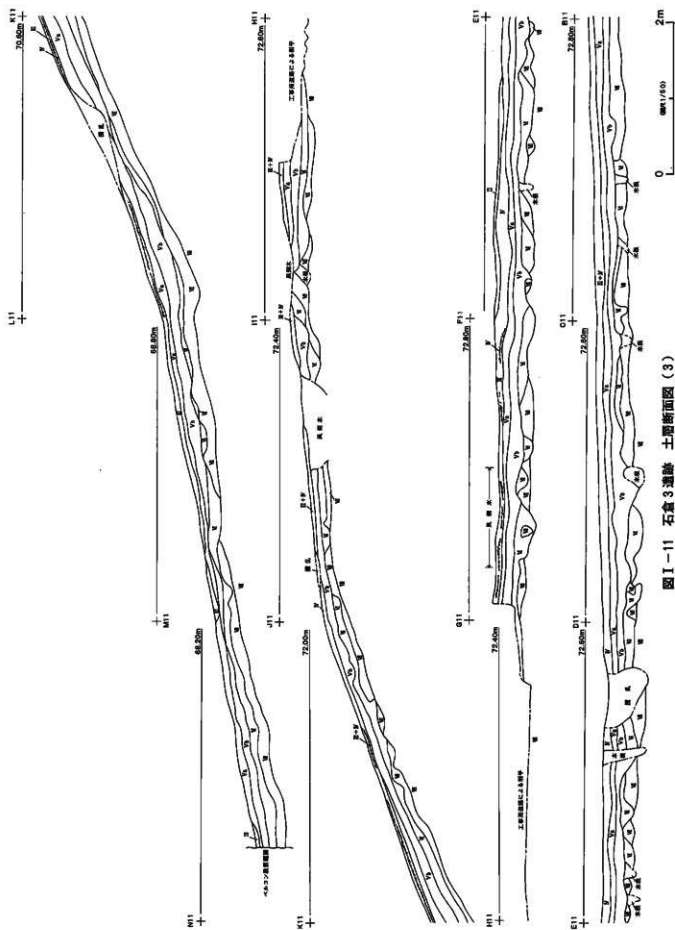


圖 I-11 石倉3通跡土層断面図(3)

8 遺物の整理と分類

(1) 土器

整理

分類後の土器は、遺構出土のものは遺構ごと、包含層出土のものは、グリッドごとに整理台帳を作成し、点数を集計した。接合にあたっては分類ごとに広げ、同一個体ごとにまとめていった。同一個体の破片のうち、報告書掲載のために一部を抜き出したものについては、バックカーボン複写メモに掲載破片と非掲載破片のグリッド、層位、遺物番号、点数等を記載し、各々に貼付した。

分類

分類にあたっては、これまでの噴火湾沿岸、渡島半島の調査結果を基にした分類を踏襲した。出土した土器には縄文時代中期前半のものと後期初頭ののものがある。便宜上、縄文時代早期の資料をⅠ群とし、以下順次前期、中期、後期、晩期をⅡ群、Ⅲ群、Ⅳ群、Ⅴ群とした。統縄文時代のものはⅥ群、擦文時代のものはⅦ群とした。この各群にアルファベットの小文字を組み合わせる時期差を示した。前半をa類、後半をb類、あるいは前葉をa類、中葉をb類、後葉をc類とした。

Ⅰ群 縄文時代早期に属するもの

- a類：貝殻文、条痕文のある土器群。(出土していない)
- b類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文などのある土器群。(出土していない)

Ⅱ群 縄文時代前期に属するもの

- a類：縄文の施された丸底、尖底の土器群。(出土していない)
- b類：円筒土器下層式に相当するもの。(出土していない)

Ⅲ群 縄文時代中期に属するもの

- a類：円筒土器上層式に相当するもの、その系譜を引くもの(サイベ沢Ⅶ式、見晴町式)。
- b類：榎林式、大安在B式、ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの。(出土していない)

Ⅳ群 縄文時代後期に属するもの

- a類：天祐寺式、涌元式、トリサキ式、大津Ⅶ群、白坂Ⅲ式、十腰内Ⅰ式に相当するもの。
- b類：ウサクマイC式、手稲式、鯉淵式に相当するもの。(出土していない)
- c類：堂林式、三ツ谷式、湯の里Ⅲ式に相当するもの。(出土していない)

Ⅴ群 縄文時代晩期に属するもの

- a類：大洞B式、上ノ圍式に相当するもの。(出土していない)
- b類：大洞C1式、大洞C2式に相当するもの。(出土していない)
- c類：大洞A式、大洞A²式に相当するもの。(出土していない)

Ⅵ群 統縄文時代に属するもの。(出土していない)

Ⅶ群 擦文時代に属するもの。(出土していない)

(鎌田)

(2) 石器等

分類後の石器は、遺構出土のものは遺構ごと、包含層出土のものは分類器種ごとに整理台帳を作成し、点数を集計した。分類と台帳の訂正は随時おこなった。

報告書掲載遺物は、遺構出土、包含層出土を問わず、残存状態が良好であるもの、その器種の特徴を反映しているものを抽出しており、器種ごとの掲載点数はかならずしも出土点数と比例してはいない。

石器の計測は「長さ」、「幅」、「厚さ」、「重さ」の項目についておこない、計測値を表に示した。前者3項目は、実測図上で互いに直交する軸の数値を計測した。欠損部分があるものは、残存長の数値を（丸括弧）でくくった。「重さ」の数値は剥片石器・100g未満の礫については小数点第2位まで計測、石斧・100g以上の礫・礫石器は10gを最小単位とする数値で示した。

分類は器種別にとどめ、細分はおこなっていない。分類に使用した名称および掲載順は以下のとおりである。

剥片石器 石鏃

つまみ付きナイフ（原則として基部は片面加工であり、「ナイフ」という呼称と矛盾するが、慣習的にこの名称を使用した）

スクレイパー（原則として片面加工、刃部が周縁の3分の1以上）

Uフレイク（使用痕のある剥片）

石核

フレイク（剥片・細片）

原石

礫石器 石斧

たつき石

すり石

扁平打製石器

砥石

加工痕のある礫（用途は不明だが、加工あるいは使用痕？と思われるものが認められたもの）
礫

(3) 記録類、遺物の収納・保管

調査現場、および整理作業で作成した各種図面、写真フィルム、遺物整理台帳は当面は北海道立埋蔵文化財センターにて保管される。

整理作業終了後の遺物は収納台帳とともに森町教育委員会にて保存・活用される。収納遺物はまず報告書掲載のものと未掲載のものに分けた。さらに遺構出土のものと包含層出土のものに分け、遺構出土のものは遺構ごとにコンテナに収納した。包含層出土のものは器種分類ごとに分け、さらにグリッドのアルファベット順にコンテナに収納した。これらのコンテナには通し番号をつけ、収納台帳を作成した。

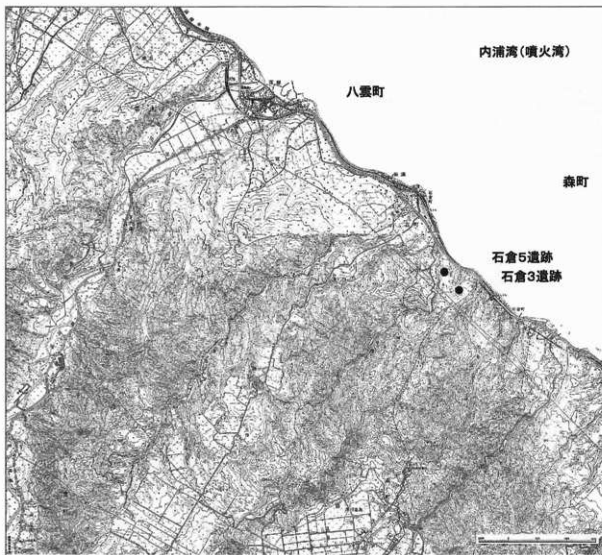
(新家)

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と周辺の地形（図II-1）

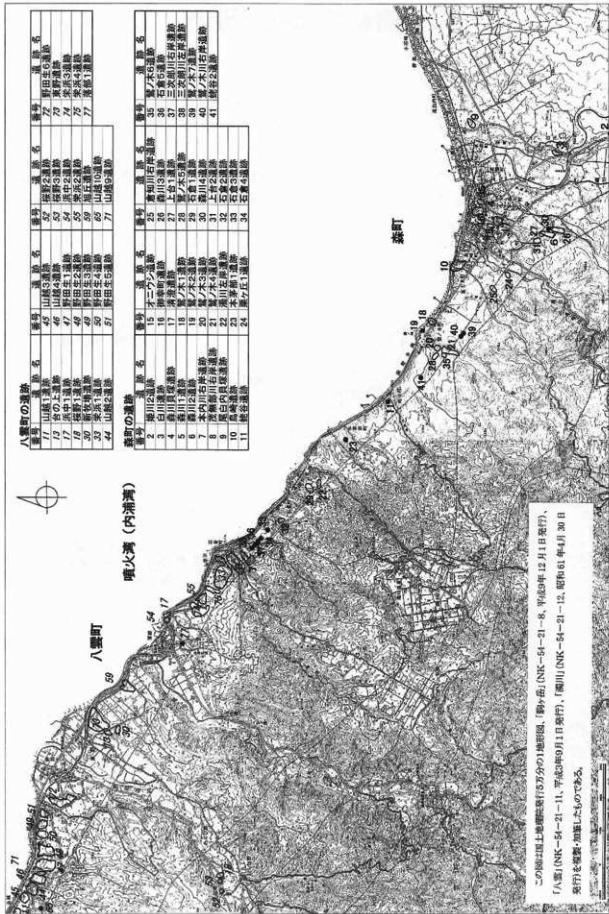
森町は北海道西南部、渡島半島の中ほどの海沿いに位置する。行政区画上是渡島支庁管内茅部郡に属し、西は茂無部（もなしべ）川を境に八雲町、南西は渡島山地を分水嶺として厚沢部町・大野町、南は宿野辺（しゅくのべ）川を境に七飯町、東は駒ヶ岳山頂から押出沢（おしだしさわ）川を境に砂原町と接し、噴火湾に北面する。

遺跡は森町市街地より北西約7kmの字石倉町にある。石倉町は北東が海、南西には山が迫る地勢で、茂無部川、本内（ほんない）川、三次郎（さんじろう）川（山野川）、石倉（いしくら）川、石川の沢（いしかわのさわ）川、濁（にごり）川など噴火湾に注ぐ河川がある。これらに面した河岸段丘上や海岸段丘上の平坦面には、平成15年11月現在で10か所の遺跡が確認されている。石倉3遺跡は海岸から約400m内陸、石倉川左岸の海岸段丘上の標高65～72m、石倉5遺跡は海岸から250mほど内陸、



この図は国土地理院発行2万5千分の1地形図、「濁川」(NK-54-21-1、昭和60年5月30日発行)、「落部」(NK-54-21-2、平成2年5月1日発行)、を複製・加筆したものである。

図II-1 遺跡位置図



図II-2 周辺の道路

三次郎川右岸の河岸段丘上の標高53～58mに立地する。遺跡周辺には落葉広葉樹のクリ、クヌギ、エゾイタヤカエデ、エゾヤマザクラ、シラカンパ、常緑針葉樹のイチイ、トドマツなどが繁茂する。

石倉の元の地名は「シュウナイ」という。これはアイヌ語の「ショ」（滝・裸岩）「ウン」（…のある所）「ナイ」（川・沢）、「滝のある沢」の意である。現在の本石倉（ほんいしくら）にそそぐ小川から得た名という（森町編 1980）。これがどのような経緯で「石倉」となったのかは不明であるが、天明4（1784）年の『北藩紀略』には「イシクラ」、寛政3（1791）年菅江真澄の「えぞでのぶり」には「石倉」という地名がすでに登場している（竹内編 1987）。安政3（1856）年の記述である『竹四郎廻浦日記 巻の三十』には「石クラ」として「…此処も文化傾人家七軒有し由なるが当時四軒、人別三十二人あり。」との記述があり（松浦著・高倉編 1978）、「渡島日誌 巻の四」には同様の記述に奇数珠求により人口が減ったとの解説が加えられている（松浦著・秋葉解説 1988）。

2 周辺の遺跡（図Ⅱ-2、表Ⅱ-1・2）

森町では平成15年11月現在、41か所の遺跡が記載されている。これらの遺跡の多くは、茂無部川から森町市街地にかけての海岸段丘上と噴火湾に注ぐ河川流域に集中している。発掘により判明したこの地域に分布する遺跡は、縄文時代中期から後期のもの、続縄文時代のものが多く見つかっている。高速道路の建設に先立って調査された茂無部川から濁川までの地域に所在する遺跡のうち、本書で報告するものを除く6か所についての概要を北から順に述べる。

本内川右岸遺跡 縄文時代中・後期の遺跡である。遺構は中期の土壇3基で、中期の円筒土器上層b式、ノグッブⅡ式、後期前葉の天祐寺式などの土器と、石鏃、ポイント・ナイフ、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、すり石、たたき石、石鏃、砥石、石皿・台石などの石器が出土した。

三次郎川左岸遺跡 縄文時代後期前葉を主体とする遺跡で、土壇1基、焼土1か所を抽出した。前期後半の円筒土器下層式、後期前葉の天祐寺式、続縄文時代の恵山式、後北式土器などが出土した。次年度以降も調査が予定されている。

三次郎川右岸遺跡 縄文時代中期後半を主体とする遺跡で、住居跡12軒、配石遺構1か所、土壇60基、焼土15か所を抽出した。住居跡には埋嚢をもつものや掘り込みの浅いものがある。土壇はフラスコ状や大型礫を伴うもの、掘り込みの浅いものなど多様なものがある。焼土は続縄文時代のものが多く、焼骨片が大量に混じるものがある。縄文時代中期のノグッブⅡ式、後期前葉の天祐寺式、涌元式、続縄文時代の恵山式、後北式土器などが出土した。次年度以降も調査が予定されている。

石倉2遺跡 縄文時代中期後半を主体とする急峻な尾根上の堅穴住居群である。住居跡11軒、土壇9基、Tビット10基、焼土2か所、土器集中4か所、フリック集中2か所、礫集中1か所を抽出した。遺物は縄文時代中・晩期の土器などが出土した。

石倉1遺跡 平成14年度から継続して調査している遺跡で縄文時代中・後期を主体とする。これまでに土壇4基を抽出している。そのうち2基は墳口部に台石や大型礫をもつ。遺物は縄文時代中期～後期初頭の土器をはじめ、石鏃、スクレイパー、石核、たたき石などの石器、合わせて約27,000点が出土している。次年度以降も調査が予定されている。

濁川左岸遺跡 縄文時代前期後半～後期前葉の集落・墓域である。遺構は住居跡19軒、土壇94基、焼土（石組炉を含む）36か所、柱穴様ビット307基を抽出している。遺物は約20万点が出土した。土器では縄文時代後期前葉の天祐寺式、涌元式、トリサキ式、白坂3式などが大部分を占め、前期後半の円筒土器下層式、中期前葉のサイベ沢Ⅶ式併行の土器、続縄文時代の恵山式、後北式などがある。石器では石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、北海道式石冠、扁平打製石器、台石、たたき石などがある。

（鎌田）

表Ⅱ-1 周辺の遺跡一覧(1) 森町

* 登録番号の太字 (1-12~14) の遺跡は図Ⅱ-2の範囲外になる。

登録番号	遺跡名称	種別	所在地	立地	標高(m)	時期(型式略名)	備考
1	堀川1	遺物包含地	字駒ヶ岳153-1~4	河岸段丘	167	縄文中期(円筒上層)	
2	堀川2	遺物包含地	字駒ヶ岳17-216、-217、-6	河岸段丘	112	縄文中期(円筒上層)	
3	白川	遺物包含地	字白川49-14	河岸段丘	48~50	縄文晩期・縄文	貝塚あり
4	森川貝塚	貝塚	森川町76~79ほか	海岸段丘	13~15	縄文前期、続縄文(恵山)、 縄文、中近世	
5	森川1	遺物包含地	森川町69-2ほか	海岸段丘	15~18	縄文前期(円筒下層b)・中 期、続縄文(恵山)	1982「森川A遺跡」森町教委
6	森川2	遺物包含地	字霞台34-1、35-2	台地	80~100	縄文中~晩期、縄文	2002「森町教委発掘調査
7	本内川右岸	遺物包含地	字石倉町610-7・8	台地	40~60	縄文中(円筒上層b、ノ ブII)・後期(天祐寺)	2003「森町本内川右岸遺跡」 北壇調報182
8	茂畑川右岸	遺物包含地	字石倉町610-2・5	台地	40~60	縄文中~後期	
9	尾白内貝塚	貝塚	字尾白内926、929-1ほか	海岸段丘	10~14	縄文晩期(大洞A')・続縄 文(恵山)	1981「尾白内」1993「尾白内2」 森町教委
10	鳥崎	遺物包含地	鳥崎81-1、字宮上見町13ほか	海岸段丘	15~30	縄文後期	1975「鳥崎遺跡」森町教委
11	姥谷	遺物包含地	字姥谷町146-1ほか	河岸段丘	30~32	縄文中(円筒上層)・後期	1971「森町教委発掘調査
12	赤井川1	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	175~195	縄文中期(円筒上層)	
13	赤井川2	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	230~235	縄文中期	
14	赤井川3	遺物包含地	字赤井川229	丘陵	210	縄文中期	
15	オニウシ	集落跡	字上台町326-18	海岸段丘	25~35	縄文早期(東鎮路田)~中期(円 筒上層)	1977「森町オニウシ遺跡発掘 調査報告書」
16	御幸町	遺物包含地	字御幸町132-2、字清澄3-1ほか	海岸段丘	8~20	縄文中期(円筒上層)	1985「御幸町」1994「御幸町2」 森町教委
17	清澄	遺物包含地	字清澄27、29-2	海岸段丘	33~39	縄文中期(円筒上層)	
18	鷺ノ木1	遺物包含地	字鷺ノ木145-1ほか	海岸段丘	15~20	縄文中期(円筒上層)	
19	鷺ノ木2	台場跡	字鷺ノ木455ほか	海岸段丘	40	近世	
20	鷺ノ木3	遺物包含地	字鷺ノ木499-2ほか	河岸段丘	40~45	縄文中期(円筒上層)、続縄 文(恵山)	
21	鷺ノ木4	遺物包含地	字鷺ノ木506~510	河岸台地	45~60	縄文中(円筒上層)・晩(タンネ トツル)・続縄文(恵山)	2001-03「森町教委発掘調査
22	瀬川左岸	集落跡	字石倉町401、446-1、448	河岸段丘	40~50	縄文前期(円筒下層)・中(円筒上 層)・後期前遺	2003「森町瀬川左岸遺跡- B3地区-」北壇調報190
23	本茅部1	遺物包含地	字本茅部町305、372~274、384	海岸段丘	80~85	縄文前期(円筒下層)・中(円 筒上層、見晴町)・晩期(大 洞C2)	2003「森町本茅部1遺跡」北 壇調報191、2004「森町本茅 部1遺跡(2)」北壇調報199
24	栗ヶ丘1	遺物包含地	字栗ヶ丘38~44	河岸段丘	35~45	縄文中・後期	2001-02「森町教委発掘調査
25	倉知川右岸	集落跡	字栗ヶ丘7、11-1・2	丘陵	75~80	縄文中(円筒上層、サイベ沢 田)・後期(トリヤキ)	2004「倉町倉知川右岸遺跡」 北壇調報196
26	森川3	集落跡	字森川町317-1・7	丘陵	100	縄文前期・中期、続縄文(恵山)	2002-03「道壇文発掘調査
27	上台1	遺物包含地	字上台33-1、42-1、364	丘陵	90	縄文後期	2003「道壇文発掘調査
28	鷺ノ木5	遺物包含地	字鷺ノ木503-1、495-4・5	河岸段丘	70	縄文後期	2003「森町教委発掘調査
29	石倉1	遺物包含地	字石倉町396~397、403、404、439	丘陵	30~40	縄文中・後期	2002-03「道壇文発掘調査
30	森川4	遺物包含地	字森川町317-18	河岸段丘	90	縄文中・後期	2003「道壇文発掘調査
31	上台2	集落跡	字上台町326-5	河岸段丘 ~緩斜面	90~100	縄文中~後期	2003「道壇文発掘調査
32	石倉2	集落跡	字石倉町146、623-1・3・4、 624-1、305	河岸段丘	60~75	縄文中~晩期	2004「森町石倉2遺跡」北壇 調報197
33	石倉3	遺物包含地	字石倉町482、483、490	河岸段丘	65~75	縄文後期(天祐寺、トリヤキ)	2004「森町石倉3遺跡・石倉 5遺跡」北壇調報205
34	石倉4	遺物包含地	字石倉町511、520、521	河岸段丘	60	縄文後期	
35	鷺ノ木6	遺物包含地	字鷺ノ木505、511	河岸段丘	65~70	縄文後期	
36	石倉5	遺物包含地	字石倉町512、513、519	河岸段丘	55~60	縄文中期	
37	三次瀬川右岸	遺物包含地	字石倉町513、516	河岸段丘	40~47	縄文前期・中・後期、続縄文	2003「道壇文発掘調査
38	三次瀬川左岸	遺物包含地	字石倉町610-24	河岸段丘	35~50	縄文前期・中・後期、続縄文	2003「道壇文発掘調査
39	鷺ノ木7	遺物包含地	字鷺ノ木町397-1ほか	尾根	60	縄文	
40	鷺ノ木右岸	遺物包含地	字鷺ノ木町396	台地	60	縄文	
41	姥谷2	遺物包含地	字姥谷町281	台地	80	縄文	

表II-2 周辺の遺跡一覧(2) 八雲町

登録番号	遺跡名称	種別	所在地	立地	標高(m)	時期(型式略名)	備考
11	山越1	遺物包含地	山越434-1ほか	海岸段丘	30	縄文中期(円筒上層)	
13	台の上	遺物包含地	東野505ほか	河岸段丘	15~20	縄文中(円筒上層)・後(土間内1)・晩期(タンネットW)	1987「台の上遺跡」八雲町教委
17	浜中1	遺物包含地	落部470ほか	海岸段丘	14~15	縄縄文(恵山)	
18	桜野1	遺物包含地	桜野25-1ほか	河岸段丘	60~65	縄文中期(円筒上層)	
30	新牧場	遺物包含地	東野757ほか	海岸段丘	30	縄文後期(土間内1)	
33	栄浜1	集落跡	栄浜89ほか	海岸段丘	32~36	縄文前・中・後期、縄縄文、縄文	1983「栄浜」八雲町教委、1987「栄浜1遺跡」同、1995「栄浜1遺跡-栄浜小学校校舎増築工事用地内埋蔵文化財報告書-」同、1996「栄浜1遺跡」同、1998「栄浜1遺跡IV」同
44	山越2	集落跡	山越349ほか	海岸段丘	20~30	縄文中(円筒上層・見晴町)・後期(天祐寺)	2001「八雲町山越2遺跡」北標調査163
45	山越3	遺物包含地	山越402-1ほか	海岸段丘	32~34	縄文早(東照路遺)・前(円筒下層d)・中(サイベ沢VI、見晴町)・後期(トリヤキ)	2002「八雲町山越3遺跡-山越4遺跡」北標調査166
46	山越4	遺物包含地	山越324-1ほか	海岸段丘	30~39	縄文前(円筒下層d)・中(円筒上層b、サイベ沢VI・VII、見晴町)・後期(天祐寺、経塚)	2002「八雲町山越3遺跡-山越4遺跡」北標調査166
47	野田生1	集落跡	野田生307ほか	海岸段丘	33~40	縄文早(貝殻文)・前(円筒下層)・中(円筒上層b、サイベ沢VI、見晴町、大安在B、ノグツブII)・後期(前菜〜後菜)、縄縄文	2003「八雲町野田生1遺跡」北標調査183
48	野田生2	遺物包含地	野田生355-1ほか	海岸段丘	34~39	縄文早(条痕文)・前(円筒下層c、円筒下層d)・中(円筒上層b、サイベ沢VI、見晴町、大安在B)・後(大津)期、縄縄文(後北)	2002「八雲町野田生2遺跡」北標調査187
49	野田生3	遺物包含地	野田生394-1ほか	海岸段丘	25~37	縄文中期(円筒上層)	
50	野田生4	遺物包含地	野田生378ほか	海岸段丘	26~38	縄文中(円筒上層b・上層c、サイベ沢VI、見晴町、榎林、大安在B)・晩期(大洞C1・C2)	2002「八雲町野田生4遺跡」北標調査171
51	野田生5	遺物包含地	野田生303ほか	河岸段丘	30~35	縄文後期(大津、手稲)、縄縄文(恵山、後北B・C2・D)、弥生系、縄文	2001「野田生5遺跡」北標調査164
52	桜野2	遺物包含地	桜野41-1ほか	海岸段丘	70~75	縄文中(円筒上層)・晩期(タンネットW)	
53	桜野3	遺物包含地	桜野22ほか	海岸段丘	80~85	縄文中(円筒上層)・晩期(タンネットW)	
54	浜中2	遺物包含地	落部459ほか	海岸段丘	15~18	恵山	
55	栄浜2	遺物包含地	栄浜214ほか	海岸段丘	31	縄文中期(円筒上層)	2000-01「八雲町教委発掘調査
56	山越5	遺物包含地	山越475、476	海岸段丘	14	縄文前・中・後期	1988「山越5-6遺跡発掘調査報告書」八雲町教委
57	山越6	遺物包含地	山越214、474、475	海岸段丘	14	縄文中期、縄縄文	
59	旭丘1	集落跡	旭丘3ほか	海岸段丘	42~55	縄文前期(円筒下層d)・中期(円筒上層b~c)	1998「旭丘1遺跡」八雲町教委、2001八雲町教委発掘調査
65	山越10	遺物包含地	山越399ほか	海岸段丘	40~50		
71	山越9	遺物包含地	山越325ほか	海岸段丘	20~35	縄文中期?	
72	野田生6	遺物包含地	野田生434ほか	河岸段丘	20~30	縄文中期	
73	東野	遺物包含地	東野252ほか	河岸段丘	10~40	縄文後・晩期、縄文	
74	栄浜3	遺物包含地	栄浜240、入沢411ほか	海岸段丘	10~40	縄文中期	2001八雲町教委発掘調査
75	栄浜4	遺物包含地	栄浜269ほか	海岸段丘	20~50		
77	落部1	遺物包含地	入沢374-375ほか	河岸段丘	26~38	縄文中(サイベ沢VII、見晴町、榎林)・後(天祐寺、手稲)・晩期(大洞A)、縄縄文(後北C2・D)	2003「八雲町落部1遺跡」北標調査181

Ⅲ 石倉3遺跡 遺構とその遺物

1 概要

今回の調査では、配石遺構を伴う土坑1基、Tピット1基が検出された。配石遺構を伴う土坑はP-1、配石そのものはS-1、TピットはTP-1と呼称した。P-1、S-1は周辺出土の若干の土器片から、縄文時代後期前葉のもの、TP-1は全く遺物が伴っていないが、検出面から縄文時代中期～後期のものと推測される。配石遺構の「規模」は、残存する最も離れた二つの大きな礫の距離を長軸とし、これに外接する長方形を設定して計測した。P-1、TP-1は、図上で外接する長方形を設定し、これを計測した。「長軸方向」は原則として、長軸が真北から東西どちらに何度ずれているかを計測したものである。平面、断面図とも縮尺は40分の1で掲載した。

2 配石を伴う土坑

S-1 (図Ⅲ-1～5、表Ⅲ-1～3、図版1・2・4)

位置 F11・12、G11、H10・11、I10・11 規模 13.32×4.80m 平面形態 東西に細長く広がる。

立地地形 調査区南東側の最も標高の高い台地上に位置する。すぐ東側は急な崖になっており、この台地上で内浦湾と駒ヶ岳を眺望するのに最も適した地点である。中心と思われる環状配石のままとりのすぐ下から直径約120cm、深さ約60cmのピットが1基検出された(P-1)。ただ、工事用道路により配石のほぼ中央部分が幅4m以上にわたり削平されており、その本来の姿と全容は不明である。配石を伴う44基の土坑の単位が4～6mごとに散らばって発見された八雲町浜松5遺跡の例とは異なり、20m以上離れた時期不明のTピットが見つかった以外、調査区内からは遺構は全く検出されなかった。上述したように付属する土坑も1基しか確認されていない。このため、大きな礫が散在する範囲全体をひとまとまりと判断、「S-1」と呼称し、あえて細かな単位に分けることは避けた。

確認・調査 包含層Vb層を掘り下げていると、長さ20～30cmほどの巨礫が数十個、まとまって出土した。またそれらの礫の周りからは、他の包含層出土の礫よりも小さめの小礫が集中して出土した。

表Ⅲ-1 遺構一覧

遺構名	図No.	発掘区	確認層位	平面形態	規模(m)	長軸方向	主な出土遺物	備考
配石遺構(S-1)	Ⅲ-2～4	F11・12、G11、H10・11、I10・11	Vb	東西に細長く広がる	13.32×4.80	N-72.6°-E	安山岩礫	縄文時代後期前葉
配石を伴うピット(P-1)	Ⅲ-2～4	F・G11	Vb	楕円形	1.24 × 1.10/0.86 × 0.75×0.70	N-40°-W	安山岩礫	縄文時代後期前葉
Tピット(TP-1)	Ⅲ-5	C・D16	Ⅶ	長楕円形	2.50 × 0.55/2.33 × 0.23×0.93	N-37.4°-E	なし	縄文時代中期～後期

表Ⅲ-2 遺構出土遺物一覧

S-1・P-1		土器		礫石器		合計
層位	分類	IVa	砥石	礫		
	Vb		36	1	8496	
P-1 覆土					2	2
表 探		1			2	3
風倒木攪乱		4		3267		3271
合計		41	1	11767		11809

包含層出土の多くの中礫とは明らかに大きさや様相が異なったため、礫の配列状態全体が現れるまで掘り下げ、平面の状況を図や写真等で記録した。特に工事用道路を挟んで北側は風倒木痕と工事用進入路により攪乱されており、この付近の礫は本来的な位置をとめていないと判断、さらにこれにより失われた礫も多いと推測される。現に、北東側の急斜面の下からは、同じような直径20~30cmほどの巨礫が数点出土しており、配石のある台地上から転落したものと見なされる状態であった。

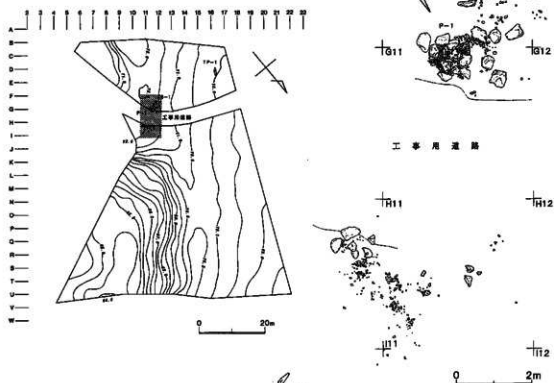
断面観察は、比較的巨礫がまとまっている部分を通るように三ヶ所で行い、図と写真で記録した。

これら巨礫のまとまりのうち、礫が径約1m強の環状に配置されているように見える部分の礫を番号を付けて取り上げていったところ、巨礫の下には直径1~3cmの細~小礫が大量に敷かれていた。さらにそれらの小石を取り上げると、直径1mほどの黒色土の輪郭が現れた(P-1)。

土層・遺物出土状況 関連すると思われる礫が11,768個、土器片は41点出土している。礫のうち長さ20~50cm、重さ10~60kg以上の大~巨礫、巨岩は38個である。それ以外の礫は直径1~5cm位の小さなもので、中間サイズの礫はない。配石が位置する範囲以外の包含層から広く見つかっている礫はこれよりもやや大きめのものである。砥面が確認された礫片1点以外はいずれも使用痕や加工痕は見当たらない。礫の出土層位はいずれもVb層であり、特に地面を掘り下げて石を立てたり、周辺の土を整地したりした様子はみとめられなかった。

付属施設 一連の配石のほぼ中央と思われる、配石がやや環状になっている部分の直下からピット(P-1)を検出した(後述)。焼土や柱穴等は見つかっていない。

斜線部分拡大図



図Ⅲ-1 遺構位置図・S-1(1)

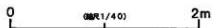
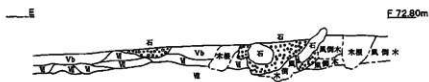
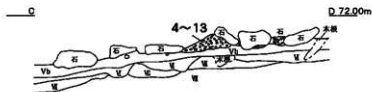
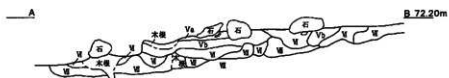
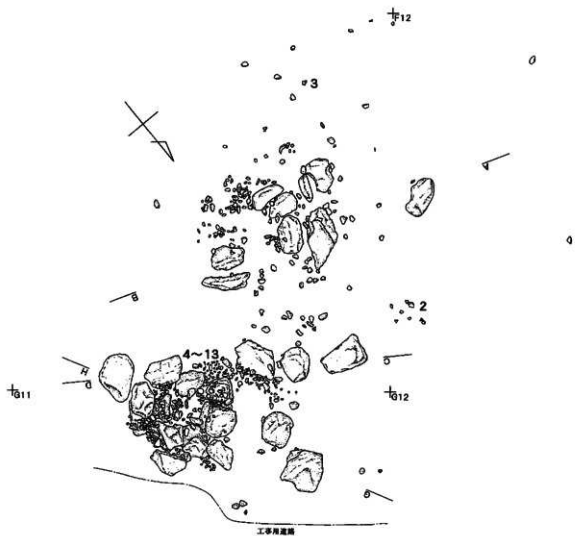
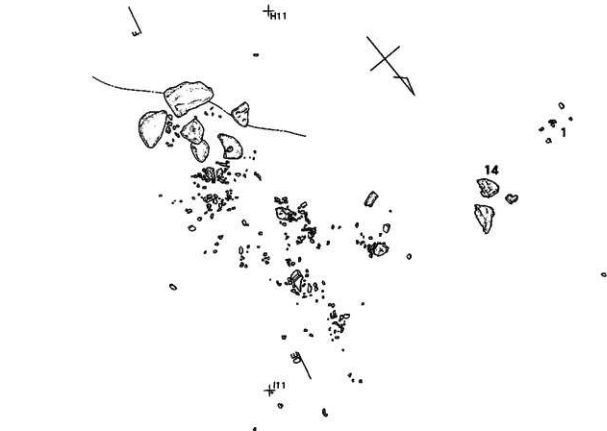
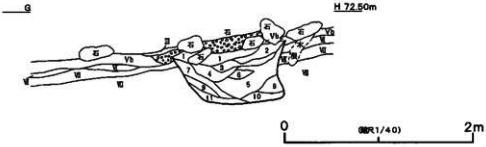
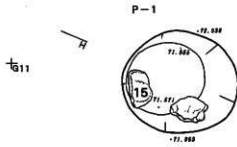


圖 III-2 S-1 (2)

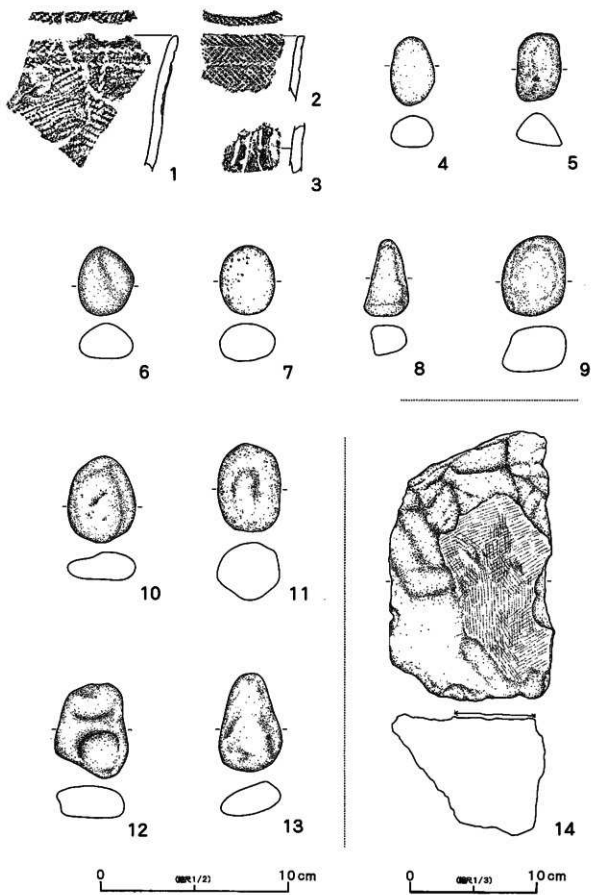


P-1 土層注記

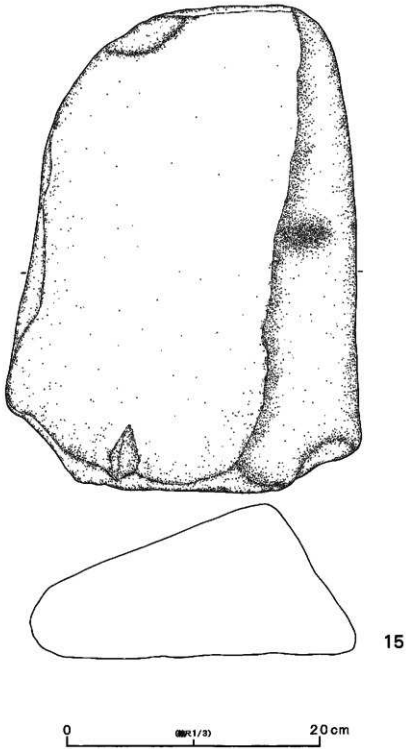
層名	土性	土色 1	土色 2	粘性	腐敗度	腐敗の 程度性	腐敗の 起伏	その他
1	埴埴土	黒褐色	2/1.5	強	すこぶら甚	判然	起伏	V>Ⅴ
2	埴埴土	黒褐色	2/2	中	強	判然	起伏	V>Ⅴ
3	埴埴土	暗褐色	3/3	強	すこぶら強	判然	不連続	V<Ⅴ
4	埴土	黒褐色	2/2	中	すこぶら強	判然	起伏	V>Ⅴ+Ⅴ
5	埴埴土	黒色	2/1	強	強	判然	起伏	V>Ⅴ+Ⅴ
6	砂埴土	赤褐色	3/4	弱	すこぶら甚	判然	起伏	V<Ⅴ
7	埴埴土	じぶい黄褐色	4/3	中	強	判然	平坦	Ⅴ<Ⅴ
8	埴埴土	暗褐色	3/3	中	強	判然	起伏	V<Ⅴ
9	埴土	褐色	4/4	強	強	判然	平坦	V<Ⅴ
10	埴土	黒褐色	3/2	強	強	判然	平坦	V<Ⅴ
11	埴土	暗褐色	3/4	強	強	判然	平坦	V<Ⅴ



図Ⅲ-3 S-1 (3)・P-1



図Ⅲ-4 S-1/P-1出土の遺物(1)



図Ⅲ-5 S-1/P-1出土の遺物(2)

表Ⅲ-3 遺構出土掲載遺物一覧

遺構名	掲載 No.	図No.	図版 No.	層位	分類	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	石材
S-1	1	Ⅲ-4	4	V b	土器	—	—	—
	2	Ⅲ-4	4	V b	土器	—	—	—
	3	Ⅲ-4	4	V b	土器	—	—	—
	4	Ⅲ-4	4	V b	礫	36.0×24.0×17.0	18.46	安山岩
	5	Ⅲ-4	4	V b	礫	36.0×24.0×17.0	18.56	安山岩
	6	Ⅲ-4	4	V b	礫	36.0×29.0×19.0	25.58	安山岩
	7	Ⅲ-4	4	V b	礫	37.0×28.5×20.0	29.70	安山岩
	8	Ⅲ-4	4	V b	礫	40.0×24.0×16.0	8.55	凝灰岩
	9	Ⅲ-4	4	V b	礫	42.0×34.0×24.0	46.53	安山岩
	10	Ⅲ-4	4	V b	礫	46.0×36.0×15.0	35.53	安山岩
P-1	11	Ⅲ-4	4	V b	礫	46.5×33.0×30.0	59.05	安山岩
	12	Ⅲ-4	4	V b	礫	50.0×38.5×17.0	39.28	安山岩
	13	Ⅲ-4	4	V b	礫	52.0×33.5×18.0	29.35	安山岩
	14	Ⅲ-4	4	V b	砥石?	21.2×13.2×9.5	2500	安山岩
	15	Ⅲ-5	4	P-1覆土	礫	38.6×28.1×12.2	19500	安山岩

P-1 (図Ⅲ-3・5、表Ⅲ-1~3、図版2・4)

位置 F・G11 規模 1.24/0.86×1.10/0.75×0.70m 平面形態 楕円形

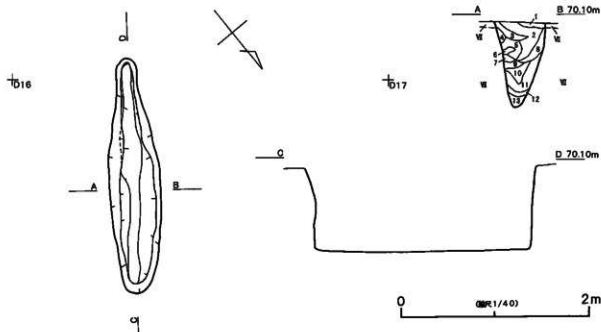
立地地形 一連の配石(S-1)のほぼ中央と考えられる、数個の配石がやや環状に集まった場所の直下に位置する。ここは工事用道路の削平からかうじて免れた範囲である。

確認・調査 S-1の配石が直径約1mの環状にまとまっている部分の下から、黒色土の輪郭が現れたため、半載して掘り下げた。坑底及び壁の立ち上がりをはっきりと確認でき、また検出位置などから見て人為的なピットと判断し、P-1とした。半載状況、完掘状況を図と写真で記録した。柱穴等の付属施設は検出されなかった。

覆土 11層に分層した。基本土層とは異なり、各種の土層が混じり合っているため、人為的な埋め戻しによる堆積と考えられる。

遺物出土状況 P-1の真上には、その上に配された数点の大きな礫との間を埋めるかのように、丸みを帯びた細～小礫がいくつかのまとまりになって敷き詰められていた。それらが使用痕や加工痕、被熱痕が見られない亜円礫である点は包含層で多く出土した中礫に似るが、その大きさは、直径1cm前後の小豆大のものから大きくても直径5、6cm程で(図Ⅲ-4)、包含層出土のものより小さい傾向にある。また形状も、扁平のものがほとんどであった包含層の礫とは異なり、やや球状に丸みを帯びたものが多い。配石用に小石を選んでいたと思われる。またこれらの小石は、覆土内にはほとんど混じっていなかった。P-1の中からは覆土上部から直径40cmほどの巨岩が2点出土した(図Ⅲ-3、5)。それ以外の出土遺物はなかった。

掲載遺物 1～3はP-1周辺の配石に混じって包含層から出土したIV群a類土器である。1は口縁に2つ1組の小突起をもち、器面・口唇にはLRの縄文が施されている。口縁には条の幅5mmの縄線文が2条巡り、突起の下には細長い「U」字状に縄が押捺されている。内面は幅3mmの筒状工具により横に磨かれている。胎土には微量の海綿骨針・角閃石・砂を含む。2は器面・口唇にRLの縄文が方向を変えて施され、折り返し口縁直下には条の幅3mmの縄線文が1条巡る。内面調整は指頭による横で、胎土には砂と微量の角閃石を含む。3は磨消された器面に曲線による沈線文が浮文状に施されている。内面は磨かれている。胎土には微量の角閃石・輝石・砂を含む。いずれも焼成は良好で



図Ⅲ-6 TP-1

TP-1 土層注記

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅硬度	層界の明確性	層界の起伏	その他
1	埴壤土	黒色	1.7/1	中	堅	明瞭	平坦	Ⅵ
2	埴壤土	黒色	1.7/1	中	堅	明瞭	平坦	Ⅴ
3	埴壤土	黒色	2/1	中	堅	明瞭	平坦	Ⅵ
4	埴壤土	暗褐色	3/3	中	堅	明瞭	起伏	Ⅵ
5	埴壤土	黒色	2/1	中	堅	明瞭	起伏	Ⅴ・Ⅵ
6	覆土	黒褐色	2/2	中	軟	明瞭	起伏	Ⅴ+Ⅵ

層名	土性	土色1	土色2	粘性	堅硬度	層界の明確性	層界の起伏	その他
7	埴土	暗褐色	3/4	中	すこぶら堅	明瞭	起伏	Ⅵ
8	埴壤土	暗褐色	3/4	中	堅	明瞭	起伏	Ⅵ
9	埴土	暗褐色	3/3	中	すこぶら堅	明瞭	起伏	Ⅵ>Ⅶ
10	埴壤土	暗褐色	3/3.5	中	すこぶら堅	明瞭	起伏	Ⅵ+Ⅶ
11	埴土	にがい暗褐色	4/3	中	堅	明瞭	平坦	Ⅵ<Ⅶ
12	埴土	褐色	4/6	中	軟	明瞭	平坦	Ⅵ
13	埴土	黒褐色	2/2	中	軟	明瞭	平坦	Ⅴ+Ⅵ

ある。4～13はP-1の真上から出土した小礫のまとまり1,230点中から10点抜き出したものである。安山岩の礫で、使用痕や被熱痕などはなく、丸みを帯びている。14は工用道路を挟んでP-1の北側に位置する礫の一つである。砥面と思われる使用痕をもつ安山岩の礫片で、配石の礫中唯一使用痕がみとめられたものである。15はP-1の覆土上位から出土したものである。P-1周辺の礫と同様の、使用痕がみとめられない安山岩の巨礫である。

性格 土層堆積状況から人為的なピットと判断した。また、配石遺構との位置関係からみて、配石を伴うピットと思われる。

時期 配石に混じて出土した土器片の時期から、縄文時代後期前葉のものと推定される。

3 Tピット

TP-1 (図Ⅲ-6、表Ⅲ-1、図版1)

位置 C・D16 **規模** 2.50/2.33×0.55/0.23×0.93 **平面形態** 長楕円形

立地地形 調査区南西側の平坦部に単独で位置する。

確認・調査 Ⅶ層調査中、長軸が北東-南西方向に細長い黒色土の輪郭を検出した。長軸の中間に土層観察用の壁面を設定し、黒色土を掘り下げた。平面の輪郭や断面観察により、Ⅶ層を壁・底にしたTピットと判断し、TP-1とした。遺物は出土していない。

覆土 13層に分層した。覆土はやや堅く締まっていた。土層堆積状況は、崩落等により土層が混在する自然堆積とも、人為堆積とも考えられる。

付属施設 柱穴等の付属施設は確認されなかった。

時期 判断の基準となる遺物が出土していないので時期は不詳である。確認された面や覆土の埋積状況をもとに判断すると、縄文時代中期～後期頃のものとして推定される。(新家)

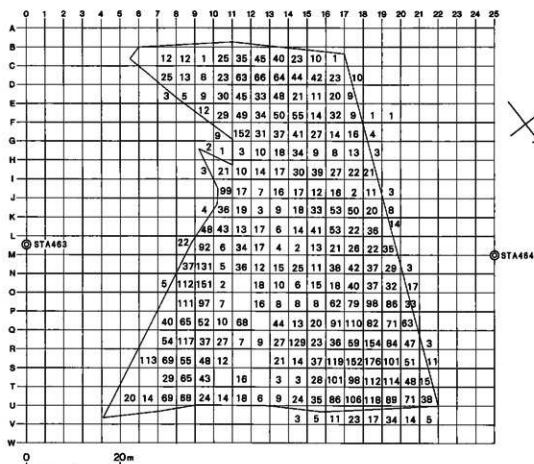
IV 石倉3遺跡 包含層出土の遺物

1 概要

石倉3遺跡の包含層からは8,412点の遺物が出土している。土器は535点、石器等は7,877点である。土器のほとんどは縄文時代後期初頭～前葉のものである。また、石器等7,877点のうち7,657点は大きさが5～10cmの中礫である。これら中礫が調査範囲のほぼ全面に分布していた(表IV-1、図IV-1)。

表IV-1 包含層出土層別遺物一覧

分類 層位	土 器			石										合 計			
	Ⅲa	Ⅳa	Ⅳ	石 鏃	きつみ付 ナイフ	スクレイパー	U フレイク	石 核	フレイク	石 斧	すり石	たたき石	磨石 磨石打		原 石	礫	
Ⅲ		4					1		5							189	199
V a		163	1	5	1	4	4	2	46	1	4			3	2864	3098	
V b	3	256	1	4	4	7	4		91	2	2	12	1		4211	4598	
V																3	3
Ⅵ		6							3	1		7			255	272	
Ⅶ															3	3	
風倒木覆乱 ・表層排土		101							6						132	239	
合 計	3	530	2	9	5	11	9	2	151	4	6	19	1	3	7657	8412	



図IV-1 包含層出土遺物分布図

2 土器

土器は535点出土している。このうち縄文時代後期のものが532点と、包含層出土土器の99.44%を占めている。このほか、中期前半のものが3点(0.56%)出土している。下の表IV-2に示した通り、後期の土器532点のうち530点は後期初頭～前葉のIV群a類土器である。このうち163点(30.75%)がVa層、256点(48.3%)がVb層から出土している。また、風倒木の攪乱からは101点(19.06%)が出土している。Ⅲ層からは4点(0.75%)、Ⅵ層からは6点(1.13%)の出土となっている(表IV-2)。

図IV-2はIV群a類土器の分布図である。これらにはタガ状の貼付帯をもち縄文が施されるものと、沈線文による文様が描かれるものがある。次頁の図IV-3上の図は天祐寺式に相当するもの(486点)、下の図はトリサキ式に相当するもの(42点)の分布図である。前者は配石遺構周辺をはじめ緩斜面部分の最も標高の高い部分と急斜面下のテラス部分、後者はテラス部分に分布している。

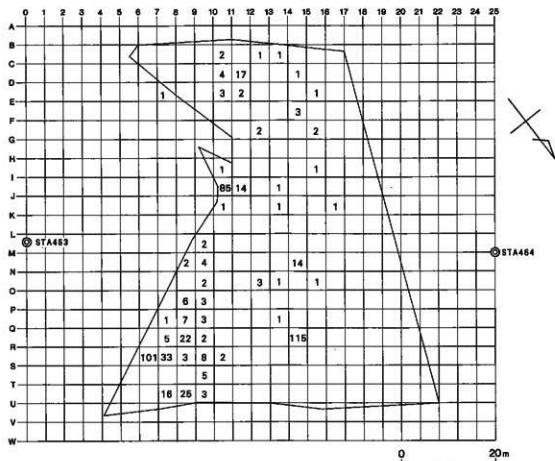
縄文時代中期の土器

Ⅲ群a類(図IV-4-1、表IV-3、図版5)

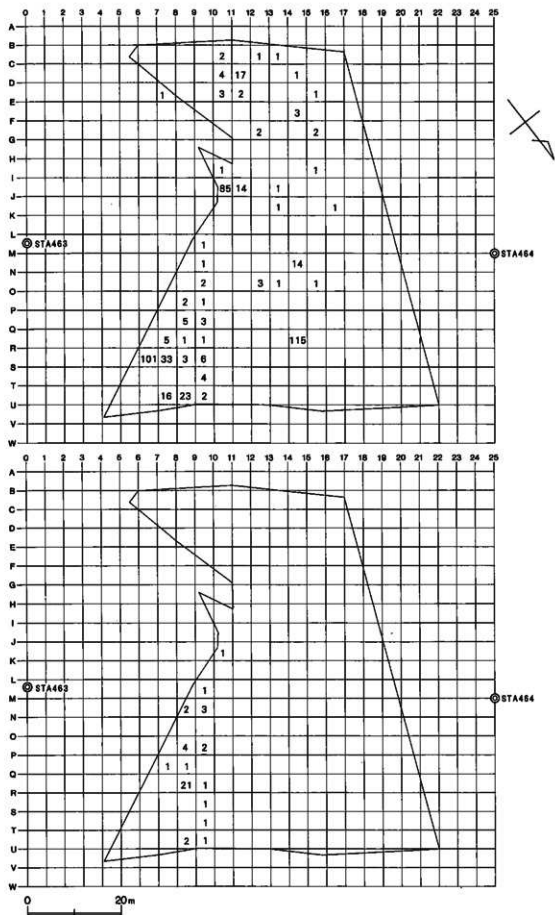
1は口縁に貼り付けた幅1.5cm、厚さ5mmの断面が半円形をなす貼付帯が、幅2mmのRLの縄による縦位の圧痕により刻まれる。内面調整は横手で、胎土に正長石、砂、繊維を含む。

表IV-2 層別別出土土器一覧

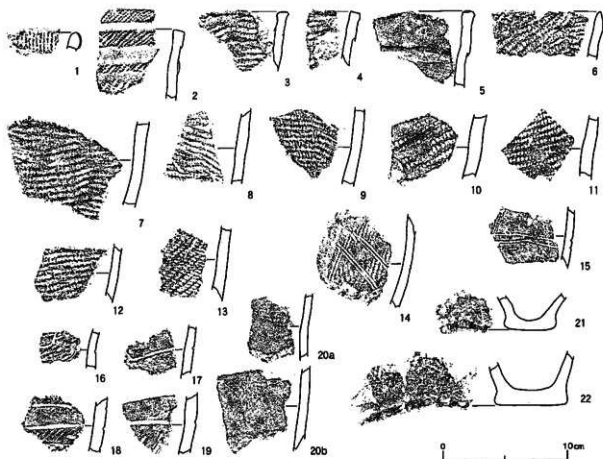
層位	分類	Ⅲ a	IV a	IV	合計
Ⅲ			4		4
V a			163	1	164
V b		3	256	1	260
Ⅵ			6		6
風倒木攪乱			101		101
合計		3	530	2	535



図IV-2 包含層出土土器分布図(1)



图IV-3 包含层出土土器分布图(2)



図IV-4 包含層出土の土器

縄文時代後期の土器

IV群a類 (図IV-4-2~22、表IV-3、図版5)

2~6は口縁部破片である。2~4は角張った口唇をもつ。2は口縁に2本のタガ状の貼付帯が巡る。これらの間の無文帯を除き、器面・貼付帯・口唇には条の幅1.5mmのLR縄文が施されている。内面調整は横なで、胎土に角閃石・輝石・細礫・黄白色軽石・砂を含む。焼成は良好で硬く焼き締まる。3・4は口唇がなで調整により内外に張り出す。器面には3はLR、4はRLの横走気味の縄文が施されている。条の幅は3~4mm。内面調整は横なで、胎土に細礫・黄白色軽石を含む。焼成は不良である。5は幅3cm、厚さ1~2mmの幅広の口縁貼付帯をもち、口唇が丸みを帯びる。口縁は緩やかな山形を呈し、頂部には指頭による凹みがあり口唇外縁がつままれている。口縁部は無文で、口縁貼付帯の下は丹念な横なでが施されている。内面調整は横なで、胎土に角閃石・輝石・砂を含む。焼成はやや不良で割れ口が層状をなす。6は口縁に幅1.5cm、厚さ1~2mmの薄い隆帯をもち、口唇は先細りとなる。器面には条の幅3~4mmのLR縄文が施されている。内面は丹念な横なでにより調整されている。胎土には微量の角閃石・輝石・砂と海綿骨針を含む。焼成は中程度である。

7~13は胴部破片である。7~10にはLR、11~13にはRLの縄文が施されている。10の施文は浅い。条の幅は8が3mm、9・11~13は3~4mm、7・10は4mmである。内面はいずれも縦なで調整されており、8・10・11の調整は丹念である。胎土はいずれも砂を含み、7・11は海綿骨針、8~10・12・13は輝石、9・12・13は角閃石、7~9・13は細礫、11~13は黄白色軽石を含む。焼成は7が中程度、8~13は焼成が良好で硬く焼き締まる。

14～19は沈線文をもつ頭部・胴部破片である。14は幅3mmの半軟竹管状工具、15は幅1mm以下の鋭利な角のある工具、16・17は幅1～1.5mmの鋭利な角のある工具、17・18は幅2～3mmの丸棒状工具により沈線文が描かれている。14は条の幅2～3mmのRL縄文を施した器面に、斜位の沈線文を交差させている。内面調整は丹念な横なで、胎土には角閃石・輝石・黄白色軽石・砂を含む。15は無文地の器面に2本1組の沈線による三角文が描かれている。胎土には微量の角閃石・輝石・細礫を含む。内面は斜位に丹念に調整されているが、胎土に含まれた細礫が調整時に引っ張られたことにより、随所に斜位方向の凹みが残る。16は条の幅1～2mmのLR縄文地に、17は無文地に方形文が描かれている。16は横なで、17は斜位に丹念な内面調整がされている。いずれも焼成は良好で硬く焼き締まり、胎土には角閃石・輝石を含む。16は黄白色軽石、17は細礫も含む。14～17は焼成が良好で硬く焼き締まる。15～17の割れ口は層状をなす。18は充填縄文をもつ。条の幅2mmのLR縄文が施され、沈線が引かれている。縄文の上に沈線が認められる。内面調整は横なで、胎土に微量の輝石・黄白色軽石・砂を含む。焼成は良好で硬く焼き締まる。割れ口は層状をなす。19は無文地の器面に横位と斜位の沈線がある。内面調整は横なで、胎土には角閃石・輝石・黄白色軽石・細礫・砂を含む。焼成は中程度である。

20a・20bは同一個体である。20aは頭部破片で、器面には条の幅1mm程の縄文が浅く施されている。20bは無文部分で縦方向に調整痕がある。いずれも内面調整は横なでである。胎土は均質で緻密である。角閃石・輝石が目立ち、微量の黄白色軽石と砂を含む。焼成は良好で硬く焼き締まる。割れ口は層状をなす。

21・22は底部破片である。21は底径4.1cm、22は底径5.5cmを計る。21は底部が丸みを帯びて張り出し、22ははやや角張って張り出す。22には縄文が認められる。いずれも焼成は中程度で、胎土には、微量の角閃石・輝石・細礫・黄白色軽石・砂を含んでいる。

2～13は天祐寺式、14～20はトリサキ式に相当する。

(鎌田)

表IV-3 包含層出土縄文土器一覽

掲載番号	発掘区	遺物番号	層位	破片			分類	同一個体破片の情報 発掘区、層位、遺物番号、点数(1点の場合は省略)、前に同じは同とした (非掲載) R10d1Vb.
				点数	掲載	総数		
1	R10d	1	Vb	2	1	2	Ⅲa	(非掲載) R10d1Vb.
2	I10c	3	風倒	13	1	99	IVa	(非掲載) I10小グリッドなし1風倒(32),I10a2風倒(2),同3同(8),同4同(4),同5同,同c2同(2),同3同(12),同d1同(18),同2同(3),同3Vb(2),I11小グリッドなし1風倒(14).
3	Q7b	1	Vb	2	2	2	IVa	(非掲載) Q7dVb(2).
4	Q7d	2	Vb	3	1	3	IVa	(非掲載) S9cVb.
5	S9c	1	Vb	2	1	2	IVa	(非掲載) Q14b1Va(19),同c1Va(8),同2Vb,同d1Ⅲ,同2Va(16),同3Vb.
6	Q14c	1	Va	86	2	115	IVa	(非掲載) R6a1Vb,同d1同(97),同2Ⅲ,同3Ⅲ,R7a3Ⅲ(2),同1Vb(12),同c2同,同a2Va(10),同d1Ⅲ,同2Vb(7).
7	R6d	1	Vb	1	1	134	IVa	
8	R8b	1	Vb	3	3	3	IVa	
9	Q8d	2	Vb	1	1	1	IVa	
10	Q9a	1	Vb	1	1	1	IVa	
11	P13a	1	Vb	1	1	1	IVa	
12	P8c	1	Va	1	1	1	IVa	
13	B10b	2	Va	1	1	1	IVa	
14	L9a	3	Va	1	1	6	IVa	(非掲載) M8d1Vb(2),M9a1同(3).
15	T9b	1	Vb	1	1	1	IVa	
16	P8b	1	Vb	1	1	1	IVa	
17	P7a	1	Va	1	1	1	IVa	
18	O8d	2	Vb	1	1	1	IVa	
19	O9a	2	Vb	2	1	2	IVa	(非掲載) O9a2Vb.
20a	Q8a	2	Vb	1	2	21	IVa	(非掲載) Q8a2Vb(11),同3Va(7),同b2同.
20b	D11d	3	Vb	1	2	2	IVa	(掲載) D11d4風倒.
22	C11a	1	Vb	16	4	18	IVa	(非掲載) C11a1Vb(12),D10d3Vb(2).

3 石器等

器種ごと、層位ごとの包含層出土点数は表IV-4に示してある。

(1) 剥片石器

石 鏃 (図IV-6-1~8、表IV-1・4・5、図版6)

9点出土している。7以外は有茎。8は茎部の形状から、つまみ付きナイフの可能性もある。1、2、4、6の基部、茎部には部分的にアスファルト様の付着物がみとめられる(図右側参照)。1、3、7は頁岩、2、4、6はメノウ、5、8は黒曜石である。

つまみ付きナイフ (図IV-6-9~12、表IV-1・4・5、図版6)

5点出土している。9は両面が加工されており、石槍またはナイフの可能性もある。10、12は片面の周縁のみが加工されている。11は背面のほぼ全面が加工されている。11、12はつまみを上にして置くと、腹面の打点は下になる。9は黒曜石、それ以外は頁岩である。

スクレイパー (図IV-6、7-13~19、表IV-1・4・5、図版6)

11点出土している。素材の腹面の打点を上にした場合、13は刃部が剥片に対して横長についている。14~19は縦長剥片の左右の側面に刃部が作り出されているもの。14は腹面側に刃部がある。13は粘板岩、15は玄武岩、それ以外は頁岩である。

(2) 礫石器

石 斧 (図IV-7-20・21、表IV-1・4・5、図版6)

破片も含め、4点出土している。20は片面に擦り切り痕が残るが、全面に良く磨かれている。ほぼ完形である。21も全面が研磨されている。刃部のほとんどは欠失しており、使用時の衝撃による破損と考えられる。両者とも緑色泥岩である。

加工痕のある礫 (図IV-8-22、表IV-1・4・5、図版6)

3点出土している。22は手のひら大の安山岩の剥片上端側面に剝離調整痕がある。スクレイパーの未製品かもしれない。

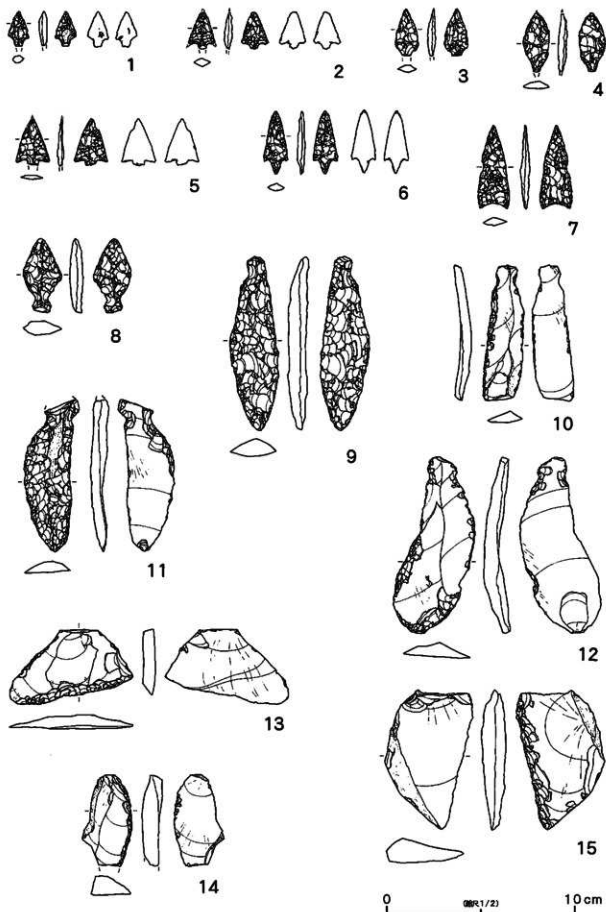
たたき石 (図IV-8-23、表IV-1・4・5、図版6)

19点出土している。23は扁平な楕円形の安山岩礫の両端を使用している。形は半円状扁平打製石器にも似るが、直線状の一辺には擦痕は見当たらない。

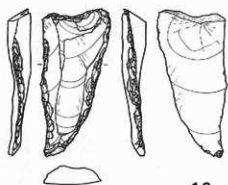
礫 (図IV-8-24~28、表IV-1・4・5、図版6)

手のひらにおさまる大きさの扁平の安山岩礫は、今回出土した遺物の大半を占めるものであり、この遺跡の特徴的な遺物といえる。調査区のほぼ全体にわたりまんべんなく出土しており(図IV-5ほか)、加工痕、使用痕、被熱痕などはほとんど見られない。遺跡のすぐ南東50m程下方を流れる石倉川の川原にも同様の形状・材質の小~中礫が見られる。

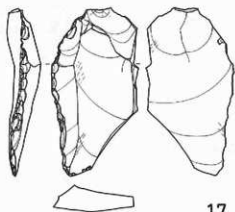
(新家)



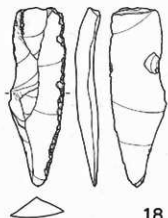
図IV-6 包含層出土の石器(1)



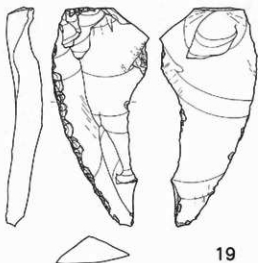
16



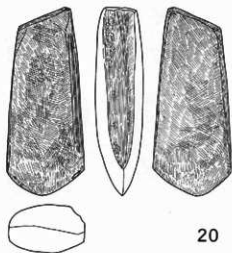
17



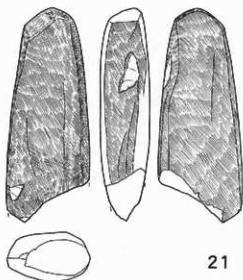
18



19



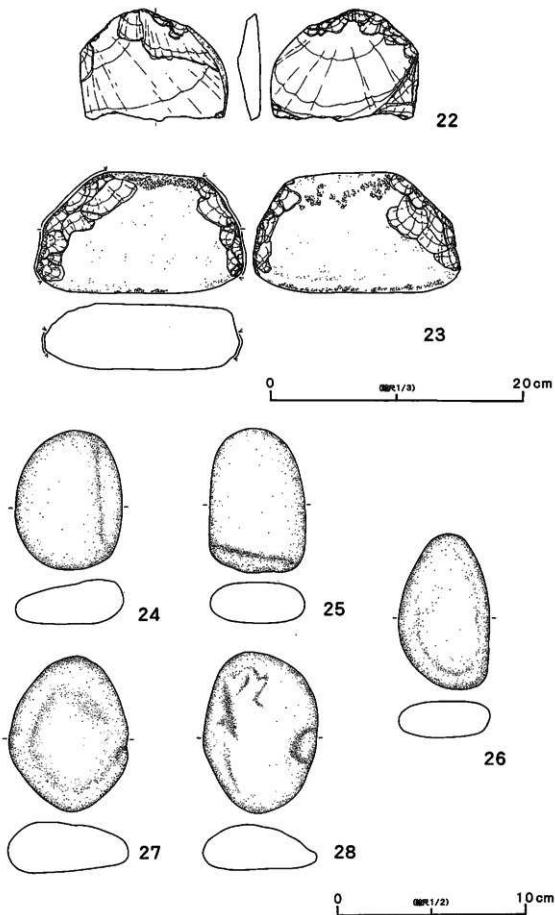
20



21



図IV-7 包含層出土の石器(2)



図IV-8 包含層出土の石器(3)

表IV-4 包含層出土層位別石器一覽

分類 層位	石 器											合 計	
	石 鏃	つまみ付 きナイフ	スクレイパー	リフレイク	石 核	フレイク	石 斧	すり石	たたき石	製石器 扁平打	原 石		礫
Ⅲ				1		5						189	195
V a	5	1	4	4	2	46	1	4			3	2864	2934
V b	4	4	7	4		91	2	2	12	1		4211	4338
V												3	3
Ⅵ						3	1		7			255	266
Ⅶ												3	3
風倒木擾乱・ 表探拵土						6						132	138
合計	9	5	11	9	2	151	4	6	19	1	3	7657	7877

表IV-5 包含層出土掲載石器一覽

掲載 No.	図No.	図版 No.	分 類	調査区	層位	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	石 材
1	IV-6	6	石 鏃	S 9 a	Vb	(18.5)×10.5×5.0	0.82	頁 岩
2	IV-6	6	石 鏃	N 8 d	Vb	(2.0)×(1.4)×0.45	0.90	メノウ
3	IV-6	6	石 鏃	Q 8 b	Va	(2.5)×(1.25)×0.4	1.11	頁 岩
4	IV-6	6	石 鏃	I 16 b	Va	(2.5)×1.8×0.35	0.92	メノウ
5	IV-6	6	石 鏃	C 13 c	Va	(3.1)×1.4×0.5	1.51	黒曜石
6	IV-6	6	石 鏃	F 16 b	Vb	3.3×1.25×0.4	1.29	メノウ
7	IV-6	6	石 鏃	L 13 c	Va	4.4×1.7×0.6	2.64	頁 岩
8	IV-6	6	石 鏃	H 14 c	Vb	3.9×1.0×0.7	4.42	黒曜石
9	IV-6	6	つまみ付きナイフ	H 14 c	Va	9.1×2.6×1.01	20.94	黒曜石
10	IV-6	6	つまみ付きナイフ	K 10 a	Vb	7.2×2.2×0.6	8.65	頁 岩
11	IV-6	6	つまみ付きナイフ	O 13 c	Vb	(8.0)×2.95×0.7	16.69	頁 岩
12	IV-6	6	つまみ付きナイフ	M 9 b	Vb	9.3×4.4×0.83	26.11	頁 岩
13	IV-6	6	スクレイパー	S 16 b	Va	4.0×6.6×0.7	17.53	粘板岩
14	IV-6	6	スクレイパー	P 13 a	Vb	(4.9)×2.7×1.0	11.37	頁 岩
15	IV-6	6	スクレイパー	B 10 b	Va	7.24×4.7×1.23	34.09	玄武岩
16	IV-7	6	スクレイパー	M 15 a	Va	7.7×3.8×1.17	26.15	頁 岩
17	IV-7	6	スクレイパー	E 14 c	Vb	8.9×4.7×1.36	50.99	頁 岩
18	IV-7	6	スクレイパー	S 11 a	Vb	9.45×3.0×1.17	28.97	頁 岩
19	IV-7	6	スクレイパー	T 5 b	Vb	11.6×5.2×1.4	68.34	頁 岩
20	IV-7	6	石 斧	E 16 d	Va	10.0×4.05×2.5	170.0	泥 岩
21	IV-7	6	石 斧	O 13 c	Vb	(11.3)×4.45×2.7	200.0	泥 岩
22	IV-8	6	加工痕のある礫	K 18 b	Vb	8.7×11.7×1.8	280.0	安山岩
23	IV-8	6	たたき石	T 12 a	Vb	9.5×16.4×5.4	1200.0	安山岩
24	IV-8	6	礫	R 17 b	Vb	7.35×5.7×2.35	140.0	安山岩
25	IV-8	6	礫	R 17 b	Vb	7.7×5.15×2.3	140.0	安山岩
26	IV-8	6	礫	R 17 b	Vb	8.3×4.85×1.85	110.0	安山岩
27	IV-8	6	礫	R 17 b	Vb	8.2×6.3×2.8	170.0	安山岩
28	IV-8	6	礫	R 17 b	Vb	8.5×6.1×2.45	160.0	安山岩



石倉3遺跡全景



包含層遺物出土状況



Tピット (TP-1) 完掘状況



ベルコン使用作業状況



配石遺構 (S-1) と調査風景



S-1 礫の出土状況



S-1 断面



S-1下のピット (P-1) 断面



P-1 完掘状況



石倉3遺跡 平坦部調査終了風景



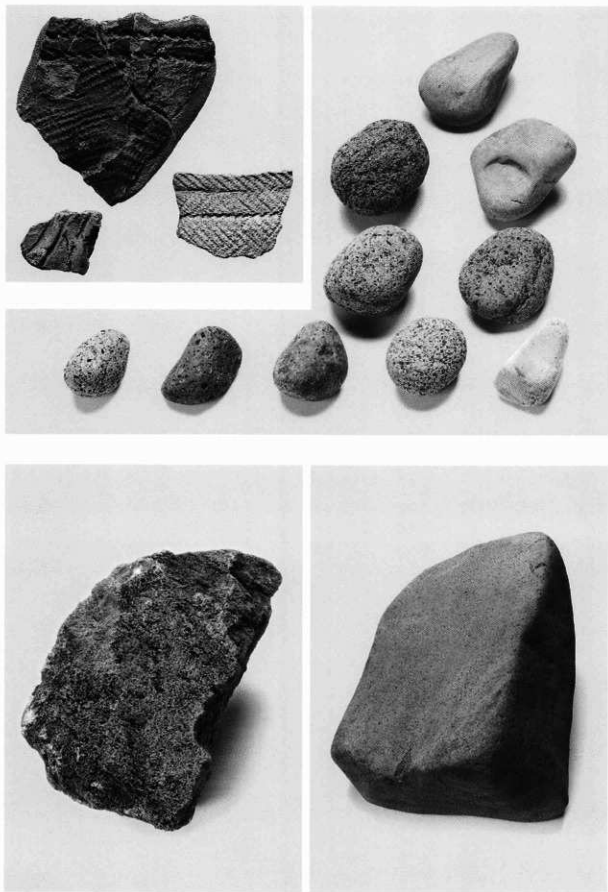
石倉3遺跡 斜面部調査終了風景



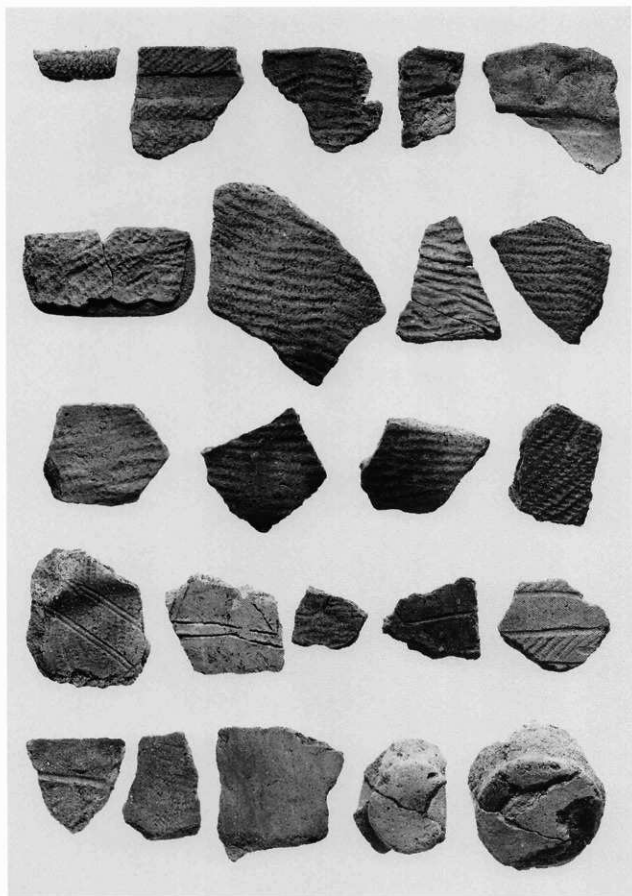
石倉5遺跡 伐閉前状況（三次郎川右岸側より撮影）



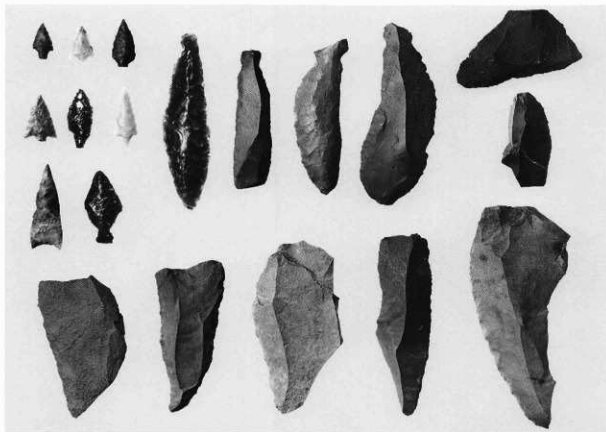
石倉5遺跡 完掘状況



石倉3遺跡 遺構 (S-1/P-1) 出土の遺物



石倉3遺跡 包含層出土の土器



石倉 3 遺跡 包含層出土の石器

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1975 『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』
 1977 『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)』
 1984 『一ノ波遺跡発掘調査報告書』
 1985 『大石平遺跡発掘調査報告書』
 1986 『大石平Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
 1986 『沖附(1)遺跡発掘調査報告書』
 1986 『沖附(2)遺跡発掘調査報告書』
 1987 『大石平遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- 石川政治 1968 「函館市天祐寺貝塚」『石器時代』第6号
- 今井富士夫・磯崎正彦 1968 「第16節 十腰内遺跡」『岩木山—岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書—』岩木山刊行会
- 大島直行ほか 1979 「知内川中流域の縄文時代遺跡—北海道上磯郡知内町湯の里1遺跡発掘調査報告—」
 知内町教育委員会
- 大沼忠春 1981 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』第66巻第4号
- 海峡土器編年研究会編 2003 『第1回 東北・北海道の十腰内Ⅰ式再検討シンポジウム資料』
- 葛西智義 1991 「縄文時代中期末葉から後期前葉の土器について」『文教台考古』6
- 葛西 勲 1979 「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化』第11号
- 加藤邦雄 1976 「縄文時代後期・晩期」『北海道史研究』11
- 金子昭彦 1996a 「十腰内Ⅰ式の三細分についての考え方—新しい部分と最も新しい部分の分離—」
 『岩手考古学』第8号
- 1996b 「十腰内Ⅰ式(新)に併行する東北地方中部の土器(1)—新古の分離についての考え方—」
 『縄文時代』第7号
- 1997 「十腰内Ⅰ式(新)に併行する東北地方中部の土器(2)—文様の系列化—」『縄文時代』第8号
- 1998a 「十腰内Ⅰ式土器の文様—文様の系列化—」『岩手県考古学』第10号
- 1998b 「十腰内Ⅰ式(新)に併行する東北地方中部の土器(3)—型式の骨格—」『縄文時代』第9号
- 久保 泰ほか 1978 『鬼沢B遺跡・棚石遺跡発掘調査報告』 松前町教育委員会
- 久保 泰ほか 1983 『白坂』 松前町教育委員会
- 斎藤 傑・氏家敏文 1974 『松前町大津遺跡発掘調査報告書』 松前町教育委員会
- 佐藤忠雄 1975 『鳥崎遺跡』 森町教育委員会
- (財)北海道埋蔵文化財センター 1985 「湯の里遺跡群」(北埋報第18集)
- 1986 『木古内町 建川1・新道4遺跡』(北埋調報第33集)
- 1987 『木古内町 建川2・新道4遺跡』(北埋調報第43集)
- 1988 『木古内町 新道4遺跡』(北埋調報第52集)
- 2001 『八雲町 山越2遺跡』(北埋調報第163集)
- 2001 『八雲町 野田生5遺跡』(北埋調報第164集)
- 2002 『八雲町 山越3遺跡・山越4遺跡』(北埋調報第166集)
- 2002 『八雲町 野田生2遺跡』(北埋調報第167集)
- 2002 『八雲町 野田生4遺跡』(北埋調報第171集)
- 2002 『八雲町 栄兵1遺跡』(北埋調報第175集)

- (財)北海道埋蔵文化財センター 2003 『八雲町 落部1遺跡』(北埋調報第181集)
- 2003 『森町 本内川右岸遺跡』(北埋調報第182集)
- 2003 『八雲町 野田生1遺跡』(北埋調報第183集)
- 2003 『森町 濁川左岸遺跡』(北埋調報第190集)
- 2003 『森町 本茅部1遺跡』(北埋調報第191集)
- 柴田信一 1995 『栄浜1遺跡—栄浜小学校校舎増築工事用地内埋蔵文化財調査報告—』 八雲町教育委員会
- 鈴木克彦 1998 「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究・4
—十腰内1式と直前型式の研究—」『縄文時代』第9号
- 1999a 「北海道渡島・桧山地域の中期末葉から後期初頭の編年
—北海道西南部の縄文後期の編年学的研究1—」『北海道考古学』第35輯
- 1999b 「北海道渡島・桧山地域の後期前～中葉の編年
—北海道西南部の縄文後期の編年学的研究2—」『国学院大学考古学資料館紀要』第15輯
- 2000 「北海道後志・胆振地域の中期末葉から後期前葉の編年
—北海道西南部の縄文後期の編年学的研究4—」『北海道考古学』第36輯
- 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』 雄山閣
- 高木 晃 1995 「岩手県の縄文後期初頭土器群の一様相」
『紀要』X V (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 高橋正勝 1962 『涌元遺跡』『北海道の文化』16
- 1972a 「北海道における縄文時代中期の終末(1)」『北海道青年人類科学研究会会報』9
- 1972b 「北海道における縄文時代中期の終末(2)」『北海道青年人類科学研究会会報』10
- 1974 「知内町涌元遺跡出土の土器と北海道南西部の縄文時代後期前半について」『北海道の文化』31
- 1981 「2. 中期の土器 北海道南部の土器」『縄文文化の研究 第4巻 縄文土器Ⅱ』 雄山閣
- 成田滋彦 1981 「3. 後期の土器 青森県の土器」『縄文文化の研究 第4巻 縄文土器Ⅱ』 雄山閣
- 1989 「入江・十腰内土器様式」『縄文土器大観 第4巻 後期・晩期・続縄文』 小学館
- 藤田 登 1985 『御幸町』 森町教育委員会
- 1994 『御幸町2』 森町教育委員会
- 本間 宏 1985 「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』第1号
- 1987 「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)—東北地方北部を中心に—」『よねしろ考古』第3号
- 松浦武四郎/高倉新一郎編 1978 『竹四郎廻浦日記 下』 北海道出版企画センター
/秋葉 実解説 1988 『武四郎蝦夷地紀行』 北海道出版企画センター
/秋葉 実翻刻・編 2001 『松浦武四郎選集 三』 北海道出版企画センター
- 三浦孝一 1998 『栄浜1遺跡 IV—八雲町歓迎案内施設整備工事用地内埋蔵文化財調査報告—』 八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一 1983 『栄浜—八雲町栄浜1遺跡発掘調査報告書—』 八雲町教育委員会
- 1991 『浜松2遺跡』 八雲町教育委員会
- 1992 『コタン温泉遺跡』 八雲町教育委員会
- 1995 『浜松5遺跡』 八雲町教育委員会
- 1998 『旭丘1遺跡』 八雲町教育委員会
- 三宅徹也 1989 「円筒土器上層様式」『縄文土器大観 第1巻 草創期・早期・前期』 小学館
- 森町 1980 『森町史』
- 森田知忠 1981 「北海道」『縄文土器大成3—後期』 講談社

報告書抄録

ふりがな	もりまち いしくらさんいせき・いしくらごいせき							
書名	森町 石倉3遺跡・石倉5遺跡							
副書名	北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第205集							
編著者名	鎌田 望・新家水奈							
編集機関	（財）北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1 Ⅷ011-386-3231							
発行年月日	西暦2004年3月5日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしくら 石倉3遺跡	いしくら 北海道茅部郡森町字 いしくら 石倉町482、483、490	01345	B-15-33	42° 9′ 38″	141° 28′ 3″	20030506～ 20030723	3,670	高規格道路 建設に伴う 事前調査
いしくら 石倉5遺跡	いしくら 北海道茅部郡森町字 いしくら 石倉町512、513、519	01345	B-15-36	42° 9′ 49″	141° 27′ 45″	20030714～ 20030807	962	高規格道路 建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
いしくら 石倉3遺跡	遺物包含地	縄文時代中・ 後期	Tピット 土坑 配石遺構	1基 1基 1ヵ所	縄文時代中・後期の土器 576点（円筒土器上層式、 天祐寺式、涌元式、トリッ キ式） 石器等19,645点（石鏃、つ まみ付きナイフ、スクレイ パー、Uフレイク、フレイ ク、石核、石斧、すり石、た たき石、扁平打製石器、原 石、礫）		配石遺構を 伴う土坑	
いしくら 石倉5遺跡	遺物包含地	縄文時代中期					遺構確認 調査	

北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第205集

森 町 石倉 3 遺跡・石倉 5 遺跡

—北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成16年 3 月 5 日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒069-0832 江別市西野幌685番地-1

TEL(011)386-3231 FAX(011)386-3238

[E-mail]mail@domaibun.or.jp

[URL]http://www.domaibun.or.jp

印刷 柏楊印刷株式会社

〒007-0802 札幌市東区東苗穂2条3丁目4-48

TEL 011-789-2377